

劇団キンダースペース上演台本

「部屋 || ROOM」

作・原田 一樹

登場人物

第一話

タカコ

ベ田

第二話

睦子

冴子

ヒラオカ(声)

第三話

男

平ヤスシ

マユミ

第四話

マサミ

タツヤ

エピソード

タカコ

ベ田

※以下の四話は、それぞれ同じマンションの、同じ間取りの四つの部屋で、同日の昼過ぎから翌日の朝にかけての時間経過の中で進行する。

第一話 部屋。

室内は引越しの荷物を出した直後。

残っているのは作りつけのカウンター式のテーブルの上にシャンペンのボトルが二本。ウォークマンが一つフタが開いている。散乱したカセットテープ。

ドアの音して、

タカコ

(コンビニの袋持って)だからもう大変よ、朝から、4・5人も来たんじゃない、引越しの人、それでもう一気でき、ああいうのってアルバイ トばかりかと思ったら、そうでもないのよね、手際がいいワケ、こっちお願いしますなんて逆に言われちゃったりして……何してんの。

メ 田

……いえ。

タカコ

ああ、スリッパ、ないのよ、みんなもう送り出しちゃって。

メ 田

あの、僕、帰りますから……

タカコ

何いってんの。よかったワヨ、下で会って。ここよくまちがえんよ、部屋……

ホラ、造りがみんな同んなじじゃない、このマンション。だから頼んだ物届かないとか、他所いっちゃうとか、もうしよっちゅうでさ。……ええと……

メ 田

……

タカコ

はじめてよね、家来たの。家って、そうか、もう家じゃないけど。

メ 田 ……メ 田です。

タカコ ああそうよ、メ 田くんでしょ。え、と、どつかそつち座ってくれる。こつち今テープひっぱり出しちゃってさ、捨ようと思ってた奴なんだけど、もうホラ、ゴチャゴチャ(片付けつつ)

メ 田 ……

タカコ 今さ、ピザ来るから。お腹へっちゃって。丁度よかった、一人じゃ食べ切れないじゃない、あんなの。ああ、そうだ、あと、見てこれ、シャンペン。冷蔵庫の中に転がってたの。今飲もうと思つてさ。……飲むでしょ。まだホラ冷えてる。……私、コップを今…。(袋からコップ出して)こーゆうのは、ちよつと洗った方がいいわヨネ、やっぱ。(キッチンへ行こうとして)……ああ、開けといてくれる、それ。

メ 田 え。

タカコ シャンペン、

メ 田 ……はあ。

タカコ よろしく(キッチンへ)

キッチンから、コップゆすぐ音。

タカコ ……(声)会社の運中、何言つてた？

メ 田 ……

タカコ 結局、私、ちゃんと挨拶言っていないのよね。ホラ、何かああいうの面倒でさ。主任にはそれとなく言っといたからいいかと思って（水音止める）。

ズ 田 ……

タカコ ……いろいろ、言ってたでしょう。

ズ 田 ……いえ。

タカコ （出て来つつ）あ、そう、はい、コップ、

ズ 田 ……（受け取る）

タカコ どうしたの、開かない？ それ？

ズ 田 あ……いえ……

タカコ サンキュー……（ボトル受け取って）二つのコップの注ぐ）

外をバイクが2・3台空ぶかししながら通り過ぎていく。

タカコ ホラ、あんなの、あんなのが多くってさ、昼間っから、子供もうるさいし、ピアノの音までしてくるし、まるで仕事になんないのよ、ここ。

ズ 田 ……

タカコ ……ええと、じゃあ、カンパイ？

ズ 田 ……あ、

タカコ （飲んで）……んー！ 喉がかわいてたから……（タバコに火つけて）

ズ 田 ……

タカコ ……どうしたの？

メ田 あ、いえ……

タカコ 嫌い？ 飲まないんだっけ、メ田くん、

メ田 こういうのは、ゲップとか出るから、

タカコ ゲップ？ いいじゃない、ゲップぐらい。

メ田 はあ……まあ、

メ田、口をつける。

外で、再びバイク音。

タカコ そういえばさ、あの子どうした。メ田くんと一緒にいった。ホラ、経理の川田さんが灰

皿買いに行かしたら、店見つからなかったっつって、やるき茶屋で灰皿買って来た……

メ田 ……

タカコ あれ、おぼえてない？ 誰だっけ？ タカイシくんだったっけ、そうだよ、タカイシだよ。

あれどうした、あの灰皿、まだ使ってるの？

メ田 ……さあ。

タカコ 変だったよね、あの子。

メ田 ……

タカコ あとホラ、市村クンに買物頼まれて、ゲームセンターにいるとこ見られてて、バレてん

のにウソつきとおした、ウソツキ、ウソツキ……サカグチ？

メ田 ……

タカコ そうか、メ田くん達あんまり口きいてなかったもんね。

メ田 まあ……

タカコ 山崎さんがあの時の話するとおかしくってさ、恐怖の使えない軍団とかっていつて。

メ田 ……

タカコ 案外、一番迷惑してんのメ田くんだったりしてね……

メ田 ……

タカコ ああごめん、私、何か買って来たな。(袋からスナック出して)こんなの、食べる？

つい買っちゃうのよね、仕事してるとき、何かこういうの横に置いとかないと落ちつかなくて。ああ、バレてるか、メ田くんには。私のデスク毎日見てもんね。

メ田 ……あの、緑川さん。

タカコ え？何？

メ田 いえ……あの……

タカコ ……ああ、仕事のこと？

メ田 ……ええ。

タカコ まあね、だってまだいろいろ準備してるだけだから。フリーなんでもっと楽かと思っただけけど、結局、全部自分でやらなくちゃならないじゃない。よっぽど使われてる方が楽みたい。

メ田 ……

タカコ あのホテル、トプロ印刷の大川部長知ってるでしょ。ああ、メ田くん知らないか、会わせなかったもんね。あの人は前から個人的にも仕事してたから、だからとりあえずはね、バックアップみたいな形でさ。でももっとホラ、いろんな仕事したいしさ……

メ田 ……はあ。

タカコ メ田くんは、どうなの仕事の方。

メ田 え？

タカコ やっぱ、いつか独立しようとか、思ってる訳でしょ。

メ田 まさか。

タカコ なんで。

メ田 僕はそんな才能ないですから。

タカコ なんで、そんなことないじゃない、デザインなんて結局は一人でやってくしかないんだから。

メ田 ……ハア。

タカコ あ、そういえば、前にチラシの仕事入った時、メ田くん描いたことあんじやない、あれ結局ボツになったけど、私、イラストはいいと思ったよ。

メ田 ウソですよ。

タカコ ほんとだって、ホラあれ、パーマかけたサルが二人でサッカーやってる奴。憶えてるじやん私、味があると思ったもん、私は。アレ？ 言わなかったつけ、私、その時。

メ田 ……冗談だから、あれ。

タカコ 何言ってるの、そんなことないって。……そうか、……そうしようかな……

タカコ ……

タカコ いや実はさ、これまだオフレコにしといて欲しいんだけど、ちょっと私に個人的に出資してくれるって話があつて。そうしたら一応事務所にして、人使つてやつてこうかと思つてるんだけど、その時、手伝つてくれないかな。

タカコ ええ。

タカコ 私はさ、もうそういう形で会社やるんなら、今までみたいになんでもかんでも仕事受けるんじゃないかって、ある程度時間かけて一つの仕事仕上げてくような形にしたいと思つてるのよね。その人もさ、そういうのだったらもう営業の方は引き受けてもいいって言つてくれるし。お金はある人なのよ。そうだったら主任にも、いずれ挨拶行かなくちゃならないから、その時、タカコさんのことも相談すればいいしさ、だからタカコさん、ちょっと本気で考えてみてくれないかな。

タカコ 僕はそんなの無理ですって。

タカコ 何言つてんの、今、そんなことないって言つたばかりじゃない。まあホラ、最初はいろいろ大変かもしれないけど、でもやっぱり自分で自分の会社ゼロから作っていくと思えばさ、私もホラ、やっぱある程度気心知れてる人とやっていきたいじゃない。別に誰でも彼でも誘つてる訳じゃないから。

タカコ 気心つたつて、まともに口きいたの今日はじめてじゃん。

タカコ ああ、そんなの関係ないつて。私ダメなのはもう目見ただけでわかるのよね。

タカコ 超能力。

タカコ ええ？ 何？

メ田 緑川さん、頭おかしくなっちゃったんじゃないの。

タカコ なあに、ダメだってそんなこと言ったら、メ田くんみたいな若い人がどんどんやっていかなくてどうすんの、ウカウカしてたら、あつという間に置いてかれちゃうぞ。

メ田 おお、コワ。

タカコ そおよ、世の中なんてそんなもんなんだから。まあホラ、私の方は別に、今日明日って話じゃないけど、でもちよつとマジメに考えて。

メ田 ええー？

タカコ あれ、もうないじゃない、なあに、遠慮しないで飲んでよ。

メ田 なんか、いいのかな。

タカコ 平気だってこんなの、大してアルコールなんか入ってやしないんだから。(メ田のコップに注ぐ)

メ田 ……

タカコ もう一本、あける？

メ田 (飲みながら手ふって)

タカコ いいのよ、どうせもう飲んじやわなきやしようがないんだから、

メ田 ええー、ハハ……

タカコ (自分のグラスにも注いで)……(ボトル置いて)……で、今日は何？

メ田 え？

タカコ だってホラ、そろそろ忙しくなってくる頃でしょ、今の時期。

メ田 ええ、まあ。

タカコ バーゲンとか始まるし。

メ田 そうみたいですけど。

タカコ ……ねえ……

メ田 あの、緑川さん。

タカコ ……

メ田 いやあの、実はね、僕もアイデアが無い訳じゃないですよ。

タカコ ……アイデア？

メ田 そう。

タカコ ああ、アイデアね。

メ田 いやまあ、これ、使えるかどうかかんないんですけどね。

タカコ へえ、何なの。

メ田 今、この国で、年間どのくらいの缶コーラが飲まれてると思います。

タカコ カン……コーラ？

メ田 年間約302万8千トン、意外に少ないんですよ。缶コーヒーの十分の一もいかないんですから。

タカコ へえ。

メ田 でね、そのコーラの新製品に関する事なんですけど。知ってます、あのコーラって、もとのビンの方は女性の下半身の形をデザインした物なんです。

タカコ ああ、そうみたいね。

メ田 さすがですね。

タカコ ……それほどでもないけど。

メ田 それで、そのデザインを缶コーラにも生かすんです。

タカコ ……え？

メ田 下半身の形の缶を作るんです。

タカコ ……

メ田 わかります？

タカコ ああ、……なるほどね。

メ田 まあこれは、特許じゃなくて、デザイン登録商標ってことになるんですけど。

タカコ ああ、登録商標……

メ田 あと、新製品にコーラウォーター。

タカコ コーラ何？

メ田 コーラウォーター、ソーダのかわりに水入れるんです。あのソーダが嫌だっていう人、割にいるんですよ、ゲップになるから。

タカコ ……ああ。

メ田 ……まあこれは、デザインとは何の関係もありませんけど。

タカコ ……そうか、メ田くん、コーラ好きなんだ。

メ田 ……

タカコ コーラ好きだから思いつくんでしょ、そういうの。

メ田 ……関係ないですよ、好き嫌いは、子供じゃないんだから、

タカコ ……ああ、そうよね、

メ田 (シヤンペン飲む)……(ゲップする)

タカコ ……でも、あれよね、そうすると、どうやってそのアイデアをコーラの会社に持ち込むか、よね……

外をバイク、

メ田、突然立ち上がって、ドアへ。

外に向けて怒鳴る。

メ田 うるせえんだよ、馬鹿野郎、てめえらブツ殺してやるかな！

タカコ ……

メ田 大丈夫ですよ、どこから言ってるかなんてわかりやしないから。あいつらみんな耳悪いんですよ。

タカコ ……

メ田 (シヤンペンの残り、自分のグラスに注ぎ切って)無くなったな。もう一本開けましょうか。

タカコ ……ああ、……酔っぱらっちゃったりして、

メ田 平気でしょう、これ大してアルコール入ってませんから。

タカコ ……

メ田 遅いですねえ、ピザ。

タカコ ……え？

タカコ ……なんていうピザ屋さんですか。

タカコ ……ああ、……ええと何だったか、

タカコ タダだな、これは。

タカコ ああそうね。……ええと、そうだ、私今テープ捜してて。もうやらなくちゃいけないことがいっぱいあつてさ。ゴミも出しに行かなくちゃならないし、管理人の所にもまだ挨拶言つてないし……

タカコ (コルク見つめている)

タカコ ……何してんの。

タカコ 知りあい、これ目にぶつけて失明した奴いるんですよ。

タカコ ……だったら、危ないんじゃないの。

タカコ ダメだな、これ、気が抜けてんのかな。(ピンを猛烈に振る)

タカコ やめなさいよ、……よしてよ!

タカコ (栓抜いて) やっぱりこれ気が抜けてますよ。

タカコ ……

タカコ ……でも、あれですね、そうするととりあえず事務所は確保ですよ。

タカコ ……何?

タカコ 忘れっぽいんですね、緑川さん、二人でやる会社のことですよ。

タカコ ……ああ。

タカコ やっぱりパソコンは入れた方がいいと思うんですけど、資本金はどのぐらいなんですか?

タカコ ……え？

メ田 資本金。

タカコ ああ、だから、そういうのはみんな任してあるから。

メ田 誰に。

タカコ だから、スポンサーの人に、

メ田 トプロ印刷の大川部長？

タカコ ああ、違うの、あの人はホラ、バックアップっていうか、そういう形だから、言わなかったっけ？

メ田 どの程度のバックアップなのかな。

タカコ 何が？

メ田 だから、大川部長。

タカコ さあ。

メ田 大川部長にお金借りに行ったら、貸してくれますかね。

タカコ ……だって、何で。

メ田 ええ、僕、緑川さんと会社やっていくとすると、今の事務所やめるワケですよ。と言っても中途採用だから、退職金は出ないと思うんですよ。それに本腰入れてデザインやっっていくんなら、やっぱり僕も引越したいですし。ひどいんですよ、今のアパート。カベがベニヤなんです。これはもともと一つの部屋を二つに仕切ったからなんですけど、二つ合わせた所で、まともな部屋じゃないですよ。それに、朝早く起きると、部屋中、煙だらけなんです。何だと思いません。

タカコ ……さあ。

メ 田 白い煙がね、こう部屋の中に、モヤみたいになって……

タカコ 火事なの。

メ 田 でしょ、そう思うでしょ。ハズレ。隣が豆腐屋なんですよ……。で、ダクトがモロこつち向いてて、部屋の中じゅうおからの煙だらけ

タカコ ……

メ 田 それと、夜中に泣き声が聞こえるんですよ、女の。フガフガフガって。僕はね、てつきり部屋の地縛霊かと思って。あ、僕見えるんですよ、そういうの。というのはね、僕には背後霊がいるんですけど、慮構橋事件で死んだ臼井二等兵っていう日本兵なんですけど。

タカコ メ 田くん……

メ 田 あ、ちよつと待って下さい、霊の話は途中で止めるとまずいから。で、話かけてみたんです、もしもして。そしたら返事するんですよ、はいはいって。僕も霊に返事されたのは初めてだから、びっくりして。でも途中でやめるとまずいと思って続けたんです、どうしたんですかって。そしたら、いえ、って。何で泣いてるんですかって、そしたらまた、いえって。でも泣いてたでしょうって言ったたら、花粉症なんですって。でね、おかしいと思って、どなたですかかって言ったたら、大家のメイですって。メイっていつても40位のオバサンなんですけどね。泊りに来てたんです、隣の部屋に。

タカコ メ 田くん、さっきの話なんですけど、

メ 田 え？

タカコ 大川部長にお金借りに行くって。

メ田 ……まさか、しませんよ、そんなこと。

タカコ ……

メ田 やだな、そんなことするはずないでしょ、会ったこともない人に。大丈夫ですよ、引越
しぐらい自分でしますから。ただ、どの程度のバックアップなのかなって思っただけで
すから。

タカコ ……

メ田 やだな緑川さん、本当に借りに行くと思ったんですか。

タカコ ……

メ田 ええと、何の話でしたっけ。

タカコ ……メ田くん、ホントのこと言ってね。何しに来たの。

メ田 ……え。

タカコ 会社の誰に、何て言われて来たの。

メ田 誰って…誰にも何も言われてないですよ。ただ、たまたま通りかかったら緑川さんが
……

タカコ 嘘つかないでね。

メ田 ……嘘じゃないですよ。

タカコ いいのよ、わかってんだから。こっちの方、メ田くんお使いに出されるような取引先な
んかないでしょう。たまたまなんて通りかかるわけじゃないじゃない。

メ田 ……

タカコ 私、全部解ってるから。

ズ田 (眼鏡はずして)あれ、何だこれ。すいません、テイツシユあります？ 眼鏡くもつちや
って。ああ、これでいいや……

タカコ ……誰に言われて来たの。

ズ田 ハア……キュツキュ、キュツキュ。

タカコ ああ、なんだ、山崎さん？

ズ田 ……

タカコ 山崎さんでしょう。

ズ田 止して下さいよ。

タカコ そうよね、あの人、陰険な所あるから。知ってるでしょ、ズ田くんも。去年、シンコー
開発のパンフの仕事、あの人、私からあれ盗ったのよ、主任にあることないこと告げ口
して。何て言ったと思う、あの人。私のこと、気違いだつて言ったのよ。気違いはあつ
ちの方なのよ。わかってんの私、なんであの人そんなこと言うのか。主任がいつも私に
ばっかり大事な仕事頼むでしょう、だからあの人……

ズ田 関係ないですよ、山崎なんか。

タカコ だつて……じゃあ誰。まさか、主任さんじゃないでしょう、あの方はそんなことする人
じゃないもの。

ズ田 ……

タカコ ……主任さんなの。

ズ田 あの会社の連中はみんな気違いですよ。山崎だけじゃないですよ、市村も川田も。

市村は人のあと尾行してウソ見抜いたウソ見抜いたって喜んでるし、川田は店閉まってるの知ってて、ワザと灰皿買いにやらすんですよ。知ってましたけどね。だからわざわざやるき茶屋行って灰皿買って来てやったんです。

タカコ ……あれ、メ田くんだったの。

メ田 あの会社でまともなのは、緑川さんぐらいですよ。

タカコ ……

メ田 主任だって、女がいるそうです。どつかのバーの女らしいですけどね、それがバレて今度離婚するそうです。

タカコ ……ウソでしょう。

メ田 ウソかどうか、自分で聞いてみりゃいいじゃん。

タカコ 主任さん、メ田くんは何て言ったの？ 私の様子見て来いって、そう言ったの？

メ田 ……だから、誰にも何も言われてないですよ。

タカコ だって、……じゃあ何で。

メ田 誰かに言われなくたって来ますよ。

タカコ ……

メ田 誰かに言われなくても来ます。それとも何ですか、誰かに何か言われなくちゃ来ちゃいけないんですか、僕は。お使いに来るような取引先のある方にしか行っちゃいけないんですか。じゃあ、僕は、どうやって来ればいいんですか。

タカコ ……

メ田 ……だから、言ったじゃないですか、あの会社でまともなのは、緑川さんぐらいですよ。

タカコ ……

メ田 (テーブルに) テープ、捜してたんですよ。何のテープでしたっけ。捜しましょうか。こつちが聞いた奴ですか？ これ借りますから(ウオークマン)。ああ、何だこれ、立ち上がりひでえな。緑川さん、これ直していいですか。ダメなんですよ、こういうの、気になって、気になって。これ直したら帰りますから。

タカコ ……

メ田 (自分のカバン捜して) ええと、確かドライバーが。ああクソ、何で持っていないんだよ、今日に限って。小さなドライバーありますか、眼鏡用か何か。無ければカッターでも。あ、カッター持ってたな(カバンからカッターナイフ出して、テーブルへ)。

タカコ ……

メ田 (ウオークマン) ああ、これはあれだな、ローラーがこつち側についてる奴だな……主任さん、自分でそう言ったの。

メ田 ……は？

タカコ 女がいるって。

メ田 さあ。

タカコ さあって、今メ田くんが言ったんじゃない。女がいるから離婚するって。

メ田 ウワサですから。

タカコ ……そうよね、自分で言う訳ないもんね、そんなこと。

タカコ ……

タカコ 誰が言ったの。

タカコ 誰でもいいじゃないですか。

タカコ タカコは誰から聞いたの。

タカコ 誰からともなくですよ、ウワサなんだから。

タカコ だって、誰か流した人がいるワケでしょう、会社の中に。

タカコ そういう人がいなければウワサなんてなるワケないじゃない。

タカコ ……

タカコ 主任さん、かわいそう、そんな根も葉もないウワサ立てられて、

あの会社ホント多いからそういうこと。そういうことで、どれだけ人がつらい思いしたり追い込まれたりするか、わかんない人ばかりなのよね。

タカコ いいじゃないですか、緑川さんもう独立したんだから。

タカコ そういうワケにはいかないでしょう。これからだって仕事上の付き合いはしていくんだから。

タカコ それは仕事上ですから。

タカコ 違うのよ、タカコにはわからないかもしれないけど、どういう会社なのかって、すごく大事なことなのよ。そういうことが仕事に響いたりするんだから。特にデザインの仕事なんて、そういうことでノイローゼになったり落ち込んだりして、何も出来なくなっちゃう人、すごくいるんだから……

タカコ ……

タカコ だから、私、自分の会社は絶対そういう風にしたくないと思ってるワケ。ちゃんと気心
しれた人たちでやっていきたいのよ、そう言ったでしょ、今、メ田くんにも。そうじゃ
なくちやいい仕事なんて出来るワケないじゃない。大川部長もね、そういうこと言っ
たことあるのよ、前。だから、私、信用してる所あるのよ、あの人は。

メ田 僕が流したんです……

タカコ 何？……

メ田 ウワサ、主任さんの。

タカコ ……

メ田 僕が、わざと目立つように、主任さんの机の上に女からの電話のメモ置いたりして。

タカコ ……だって、何で。

メ田 くやしかったんですよ、あの人、人気あるから。

タカコ ……ウソでしょ。

メ田 ウソです。

タカコ ……

メ田 緑川さん、電話借りられますか、ちよつとかけなくちやいけない所忘れてて。これ、ま
だつながってますよね……(ダイアル)

タカコ ……どこにかけるの。

メ田 会社です……あ、もしもし、メ田ですけど、主任お願いします。

タカコ メ田くん、何してんの……

メ田 はい、あ、そうですか。じゃ伝えといて下さい。今日僕帰りませんから……

いえ、直帰じゃなくて、やめるんです、おたく。心配ありません、スカウトされたもんで、新しい事務所に。スカウトです。スカウト。荷物は取りにいけます、その内。ええ、そんなじゃ、そーいうことで。(切る)

タカコ ……

市村でしたよ、尾行好きの。今の「ええ、そんなじゃ、そーいうことで」っていうの、マネなんです、あいつの。怒るんですよ、これやると。今頃電話の向うで真っ赤になつてますよ。

タカコ ……どうということ。

市村 どういうことって、辞めたんです。

市村 何考えてんの？

市村 いま辞めたなって考えてます。

タカコ だって、どうすんのよ。

市村 いいんですよ。いずれ辞めるつもりだったんですから。ちよつと早まっただけです。

どのみちあんな会社つぶれますよ。尾行の市村に、インケン山崎に、灰皿集めの川田に恐怖の使えない軍団。で、そいつらの仕事が無サ作りと来たら、デザインなんかしてるヒマないでしょう。ウカウカしてる内に置いてかれるのがオチと来たもんです。ああこりゃこりゃですよ。

タカコ だって、困るわよ、私だって。

市村 何で困るんですか、緑川さんが。

タカコ だって、主任にだって挨拶いかなくちやいけないし。

△田 行けばいいですよ、別に緑川さんの所に行くなんて言っていないから、関係ないですよ。

タカコ 私の方だって、今日明日の話じゃないのよ、そう言ったでしょ。

△田 はい、存じます。

タカコ まだわかんないのよ、どうなるのか。

△田 そりゃそうでしょう、会社作るのなんて、そう簡単なことじゃありませんから。

タカコ だって、半年かかるかもしれないし、一年かかるかもしれないし、

△田 そんなもんですか、待ちますよ、そのぐらいなら。

タカコ だから、待たれたって困るのよ、何考えてんのよ、あんたの面倒まで見られるワケないでしょう。

△田 なんだ、緑川さん、そういうこと心配してたんですか、止めて下さいよ。実は僕、この間、親父が脳卒中で、遺産で北海道の牧場が丸々入ったんです。兄の方にですけどね。

で僕の方には現金でくれることになって。いづれ弁護士通じて緑川さんの会社にも出資させますから。

タカコ ……

△田 じゃなけりや、こんな辞め方する訳ないじゃないですか。緑川さんホントに頭どうかしちやったんじゃないの。

タカコ ……ウソね。

△田 ウソです。家は埼玉で製麺業やってます。でも土地持ちですから。一応三階建てのビルになってますから。ただこの間タバコやめて、あと30年は生きるか、畜生。

タカコ ……

メ田　でも二番目の兄が逆タマで、これはホントの話ですが、長野の松茸山持つてる人のいとこの娘に当たる人の所に養子で入りましたから。だから松茸は毎年くさるほど送って来て。

タカコ　私、帰るのよ実家に……引越すんじゃないの。

メ田　……

タカコ　ああ、もちろん、ずっと帰ってるって訳じゃないけど。

メ田　……知ってますから。

タカコ　………何で。

メ田　運送屋のトラック止めて聞いたんです、さつき。

タカコ　……

メ田　ウソです。今朝、主任さんが緑川さんの実家の方に電話してるの聞いたんです。あそこ
の電話は会議室の内線で全部聞こえるんですよ。

タカコ　……

メ田　緑川さんのデスクも、今日、山崎がタカイシ使って片付けさせてました。タカイシとサ
カグチの使えない軍団のデスクになるそうです。

タカコ　……そりゃ、まあ、そうよね。打合せすつぽかして、半月も会社無断で休んでりや、誰
だってそうするワヨ。私だったら三日で片付けさせちゃうと思うな。よく辛抱した方
よ、主任も。

タカコ ……
緑川さん、(ウォークマン見せて)これ、このでっぱり、これちよつと折っちゃつていいですか。これ本体には全く影響ありませんから。カセット入れる時に、ちよつとこう落ちないようにすればいいだけです。本当、全然大丈夫なんです。

タカコ ……
いいですね、折っちゃつて、じゃあ折ります。

外をバイク。

タカコ ……
これ、どっちみちあまりイミないんです。メーカーによつても、ついてる奴とついてない奴とあつて……(外に)おおい、うるさいぞ。ええと、何の話でしたっけ。アイワと確か、ソニーはついてたかな。ソニーでも確か海外仕様の奴はついてないんです。

タカコ ……
ああ、もうすぐですから。

タカコ ……
捨てるの、それ。もう荷物送っちゃつたし。

タカコ ……
そうですね。(ウォークマン置いて)

タカコ ……
でも、直るんなら、直してくれれば助かるけど。

タカコ ……
これ、もう飲まないわよね。(シャンペン等、片付ける)(キッチンへ)

窓外を子供の声。

ズ田、カッターを握っていて、指を切っている。

ズ田 ……

タカコ (戻って) ……どうしたの、ズ田くん。ケガ？

ズ田 いえ。

タカコ やだ、薬もう送っちゃったのよ。

ズ田 ツバで直りますから。

タカコ ちよつと見せてよ。

ズ田 いえ、大丈夫です。僕のツバは人より粘着性が強いんです。アドレナリンが少ないから
だと思っんですが。ツバで写植もはれます。

タカコ (手取って) 切れてるじゃない。

ズ田 ……

タカコ 今、下のコンビニ行つて薬買って来るから。

ズ田 大丈夫ですから。

タカコ ここ押えて。

ズ田 ……(押える)

タカコ 待ってて、ね。

ズ田 ……いえ。

タカコ
すぐだから。

タカコ、出て行く。
ドア音。

田 ……大丈夫ですから。

暗転。

第二話 部屋。

同日、夕刻。

大きなトランクを持って、睦子(33)、入ってくる。

睦子

ただいま……何処？ トイレ？ ごめんね遅くなっちゃって……。遅くないか別に、予定言ってしまったもんね。なんかログセになっちゃって。

……留守の間、どうしてた？ ちゃんと御飯食べてた？

キレイにしてあるじゃない、部屋。

電話あったでしょ、事務所の方から。あたし、向うのホテルとか全部紙に書いたのに、忘れちゃったのよ、事務所に帖ってくんの。聞いて来たでしょ。……ああ、いいよ、トイレ出てからで。

ビーフジャーキー買って来たよ。

……着がえんのも疲れちゃったな。いいかこのまんまで……

コーヒー飲むでしょ。お湯わかしてある？ ああ、いい、やるから……

長いね、トイレ……大丈夫？ また痔出たんじゃないの。

飲みに行ったでしょ。人がいないとすぐ飲みに行っちゃうんだから。葉ちゃんと飲んだ？

……(ビーフジャーキーの袋見て)あれ、これ、この間吉川さんに貰った奴と違うかな。

……(開けて)(匂いかいで)同ンなじだよねエ、ビーフジャーキーなんて、どれでも。

(二つ口に入れて)あ、これカタいわ。(かみながら)どうしよう。三津田さんと斉藤さん
ところにも買って来たんだけど、やめた方がいいかな、これ。
(もう一つ二つ食べて)あ、カタいわ、やっぱ。何でだろう、高い奴買って来たのに。
ねえ、どうする……。

と、いつの間にかバスルームから出て来て部屋の中にいた冴子(25)と目が合う。
冴子は、頭とエリにタオル。洗髪していたところ。

冴子 ……誰に言ってるの。

睦子 ……

冴子 やめてよ。誰かに聞かれたら誤解されるじゃない。私、痔なんか出したことないから
ね。

睦子 ……

冴子 ……バスルーム、ちよつと借りてるから……。

冴子、バスルームへ。

睦子 ……ちよつとよかった、ビーフジャーキー持っていくでしょう。これ、たくさん買って
来たから。

冴子 ……(バスルームから)かたいんでしよう。

睦子 ……じゃあ、マカダミアナッツ。キクチさん好きよね、甘いの。

冴子 ……いらぬ、うちもいっぱいあるの、それ。

睦子 ……あ、そう。

バスルームの水音。

睦子 ……楽しかったア、バリ島、バイク借りてさ、島内一周したの。

もうバリバリ言わしちゃって、大変。踊りも見たしね、こんな奴。あ、写真、見る？
海がもう、マツ青。

水音。

睦子 私なんかさ、ホラ、自転車もロクに乗れなかったのに、バイクなんか乗っちゃって、

そういう所が、南の島のすごい所よね。(フィルム出して)

あ、なんだ、まだ現像してなかった。

冴子 (声 以下、冴子出て来るまでずっとバスルームで)

そんなに楽しかったんなら、なんでこっちに帰って来ちゃうのよ。

睦子 なんてって……だってまさか、バリ島人になっちゃう訳にはいかないじゃん。

冴子 そうじゃなくて、何で、こっちの家に帰って来ちゃうのよ。

睦子 ……だって、ここ私の部屋なもの。

冴子 あんたたちの新居はどうしたのよ。新しいマンション借りたんでしよう、ヒラオカさんの会社の近くに。

睦子 ああ、あれ、あっちはホラ、私荷物送っただけだから。

冴子 引越したんでしよう。

睦子 だから、荷物送っただけ。

冴子 (水音止まる) そういうの、引越しって言うんじゃないの？

睦子 大丈夫なのよ。こっちもホラ家賃入ってるしね、三ヶ月先まで。

冴子 え？

睦子 私、イヤなのよ、そういうの先に先にしてないと。

電話料金だつてさ、いくら使うかわかんないのに、先払いしてるぐらいなんだから。(ドライヤーのスイッチ入れて)聞いた。

冴子 え？

睦子 き・い・た、さつき会ったのよ、ここ開けてもらう時、管理人のおばさんに。

冴子 あ、そうなの。

睦子 おばさん、変な顔してたわヨ。

冴子 いいの、いいの、気にしなくて。あのおばさんいつも変な顔してるから。

睦子 ……。

冴子 あ、ねえ、あんたこれ知ってる、クイズ。

目にあつて口にない。マツにあつて、マチアワセにない……。

ヤニ。

えっ？

ヤ、ニ、

ピンポン、それは超簡単なやつ、じゃあ、墨汁にあつて、インクにない。

カフェオレにあつて、ブレンドにない。恋愛にあつて、色恋にない。

……。

冴子 わかんない？これレベル2ね。もう、行きの飛行機の中でさ、大クイズ大会。

これ、おかしいのはさ、わかんない奴はもう本当にわかんないのよね、最後まで。

(バスルームより頭ふきつつ出て来て) ヒラオカさん、心配してたワヨ、

……電話あつたの？

あつたから来たんじゃない……。

……私も丁度出かける所だつただけどね。

何だつて？

何が。

ヒラオカさん。

だから、成田でいなくなったつて……。

それだけ？

それから、こっちに來てるかもしれないけど……つて。

そう……

冴子 ヒラオカさん何したの？

睦子 何って。

冴子 ウワキ？

睦子 えっ。

冴子 ……浮気したの。

睦子 誰が？

冴子 だから、ヒラオカさん。

睦子 まさか。だって私たち、結婚してまだ一週間たってないのに。

冴子 そんなのわかんないじゃない。

睦子 えっ。

冴子 旅行先で女が出来るって事、よくあるでしょ。

睦子 新婦旅行で？……

冴子 じゃあ暴力だ、何部だったの、あの人、大学の時。

睦子 インド研究会とヨガクラブ。

冴子 病気？

睦子 保険証、生まれてから一度も使ったことないんだって。

冴子 じゃあ、あれだ。あっちの病気だ。

睦子 何それ。

冴子 多いのよ、最近、そういうの。何か変なことさせられたんでしょ。

睦子 何よそれ。

冴子 だから……知らないわよ、私だって。

睦子 ……看護婦の恰好して何かして欲しいとか、そういうんじゃないの。
まさか。

冴子 ……じゃあ、何なのよ。

睦子 ……だから、そんな、変なんじゃなくて。

冴子 変なんじゃなくて、何なの？

睦子 ……わかんない。

冴子 わかんない？

睦子 まだ、わかんない。

冴子 何なのそれ。

睦子 ……だって。

冴子 あんた、でもそれじゃ困るワヨ、ウソでも何かないと、

睦子 世間の人に説明のしようがないじゃない。

睦子 何であんたん所にかけてたんだろうね。

冴子 ……ええ？

睦子 デンワ……ヒラオカさん。

冴子 何でって、だから、他にかけるところも思いあたらなかったんじゃないの。

睦子 こっちにかけてくればいいのに、もったいないじゃない電話代。

冴子 ……ねえ、あんた、もしかしたら初めからそのつもりだったの？

睦子 何、そのつもりって。

冴子 だから、はじめからこっちに帰って来ちゃうつもりだったの？
睦子 まさか、だって、だったら結婚式なんてするワケないじゃん。
冴子 じゃあ何で解約しなかったのよ、この部屋。

家賃だって返ってくるじゃない、そうすれば。

だから、……忘れちゃったのよ。

……

睦子 ホラ、式の当日までゴタゴタしててさ、大変じゃない、あれ。

あんただって知ってるでしょ、ついこの間だったんだから、

睦子 (見回して)この部屋、広いわよねえ、こうやって見ると。

あんた覚えてる、ホラ、ここ越して来た時、あんた冷蔵庫の下じきになって、あの時のアザどうした？ もう消えた？

まだ。

睦子 あ、そう、大事にしないと。

と、電話のベルが鳴る。一回、二回……

冴子 ……

睦子 ……

冴子 ……出ないの。

睦子 ……(電話見ている)

冴子 悪いんじゃないの、出ないと。

睦子 出て、何て言うの。

冴子 だから。

と、電話、留守電になる。

「はい、ただいま留守にしております。

御用の方は発信音のあとにメッセージをお残し下さい……」

ピー……

睦子 ……もしもしぐらい言えばいいのに。

電話の声 「……もしもし、……ヒラオカですけど……」

睦子 ……

電話の声 「えーと、……またかけます」(切れる)

睦子 ……

冴子 ……

睦子 (ビーフジャーキー)ねえ、これ、ゆでてみようか。やわらかくなると思わない。

それとも細かくちぎって、お茶漬けにかけるとか……

ねえ、今日ゆっくりしていけるんですよ。久しぶりにごはん一緒に食べようよ。

スキヤキやろうかこれで、牛にはかわりないんだから……

今日泊まってけば。いいでしょう、キクチさんには私から電話入れるから。

冴子 どうやって拍まるのよ、ここに。

睦子 布団でしょ、布団頼むから。一組ならもう、すぐ届けてくれるんじゃないかな。

私、敷布団だけでいいから。ホテルで盗って来たバスタオルあるし。

あんた掛け布団二つに折ってさ、寝ればいいじゃん。昔よくやったじゃない。

そうやって泊まってたじゃない。

……

睦子 わかった、じゃああんた敷布団の方でいいから。ね、そうしよう、決まり。

冴子 ……

睦子 さて、と。じゃあスキヤキの材料は、あとで布団頼む時に買いにいけばいいし……

あれ、あんた一人でここにおいて何してたの。お茶ぐらい飲んでればよかったのに。

ヤカンはおいてあったでしょう。あれ、捨てるつもりだったから(とキッチンへ)

……。

睦子 (キッチンから)紅茶でいいよね……。

冴子 (メイクに戻る)

ややあって、睦子、キッチンから、トランク持って、出てくる。

睦子 これ(トランク)、あんたの？

冴子 ……そう。

睦子 どうしたの？

冴子 どうしたって……。

睦子 だってこれ……。

冴子 別れたの。

睦子 ウワキ？

冴子 ちがうわよ。

睦子 暴力？

冴子 まさか。

睦子 あんたまさか、看護婦の恰好して……。

冴子 それはヒラオカさんの話でしょ。

睦子 ヒラオカさん、そんなことしないワヨ。

冴子 私の場合はね、もうはつきりしてるから。

睦子 何。

冴子 性格の不一致。

睦子 ……だって、それでキクチさん何も言わなかったの。

冴子 何もって、だって、何言うのよ。

睦子 しょうがないじゃない、これはもうはつきりしてるんだから。

と、電話。

リーン、リーン、続いて留守電のアナウンス。

睦子 キクチさん、じゃない。
冴子 まさか。
睦子 出てよ。
冴子 何で私が出るのよ。
睦子 だって……。
電話の声 「あの、キクチですけど、……ごぶさたしてます」
冴子 ……。
電話の声 「ええと……、またかけます」(切れる)
冴子 ……さてと、じゃあ私ちよつと。
睦子 どこ行くのよ。
冴子 面接。つとめるのよ、私。
睦子 どこに。
冴子 日の丸。
睦子 何それ。
冴子 クラブ。さつき駅で拾った新聞に募集広告出たの。(と、ちぎった新聞)
睦子 ……あんた、止めなさいよ、何考えてんの。
冴子 何で。
睦子 だって、そんなの大丈夫なの。
冴子 大丈夫でしょう、寮だってあるって書いてあるし。

睦子 寮って、あんた寮入るつもりなの。

冴子 だって私、家出てきたから。

睦子 キクチさん、知ってんの？

冴子 これから、

睦子 ……これから？

冴子 その内ね、お店に招待してあげようと思って。

睦子 何それ……？

冴子 そうすれば、おどろくでしょう。あの人、私には水商売出来ないと思ってんだから。

睦子 あんた、そんなことの為にそういう所に勤めようっていうの。

冴子 何言ってるのよ、生活費だって稼がなくちゃならないじゃない。

睦子 私、あんたと違って仕事やめちゃったんだから。

睦子 だめだって、そんなの。

冴子 何で。

睦子 だってそんな、キクチさんにあてつける為にそういう所行くなんで。

睦子 そんなんで勤まるわけじゃないじゃない。

冴子 あてつけじゃないワヨ。

睦子 ……。

冴子 私ね、昔からやってみたかったの、客商売。けっこう自信あるのよね。

睦子 こう見えて、文化祭じゃいつも模擬店出してヤキソバ売ってたしね。

睦子
冴子

あんた知らないかも知れないけど、デニーズでバイトしてたことだつてあるんだから。一日でやめちゃったじゃないの、

あれはホラ「ようこそデニーズへ」つて、あれがどうも性に合わなくてさ。でも、ひきとめられたのよ、辞める時、一応。

OLやつてた時だつて、コーヒーの出し方上手いって、会議の時のコーヒーは全部私が出してた位なんだから。

睦子
冴子

それで怒つてたじゃない。コーヒー出す為に会社に入ったんじゃないとか言つて。そうだつて。

睦子

……あんた、仕事したいの。

冴子
睦子

だから、生活の為でしょう、それは。別れたんだから自分で何とかしなくちゃね。キクチさん、だめだつて、仕事しちゃ？

冴子
睦子

別にそんなこと、言つてないけど。だつたら、勤めればいいじゃない。

冴子

どこに？

睦子
冴子

捜せばいいじゃない、もつとちゃんと。今そういう雑誌いくらでも売つてるでしょう。売り切れ、今日駅で見たら。

睦子
冴子

だからって何もゴミ箱でみつけなくなつて。ゴミ箱じゃないつてば。ちゃんとベンチの上に置いてあつたんだから、次の人が読める

ように。

睦子 明日、買いに行けばいいじゃない、私つき合うから。
冴子 ……一人で行くわよ、そんなの。
睦子 じゃあ、いいけど……。
冴子 (ちぎった新聞を手にとって見ている)……。
睦子 ……拍まっつていくでしょう、今日は。
冴子 ……。
睦子 ……これ(冴子のスーツケース)こっちに置いとくから……
あ、何か出しとくものあるんなら、出しといて。
冴子 ……あの人、マスクして寝るのよね。
睦子 ……マスク、……キクチさん？
冴子 そう、信じられる？
睦子 マスクって、あの、カゼひいた時にする奴？
冴子 喉が弱いんだって、かれちやうのよ朝。
睦子 ……ああ、喉がね。
冴子 時々、そのマスクが眠ってる間にズレちゃって、はみ出したガーゼが鼻の下でヒラヒラしてんの、鼻なんかピーピーなっちゃって。
睦子 ……直してあげればいいじゃない。
冴子 直すわよ、見てられないもん、そんなの。
睦子 そうすると、どうすると思う？ 笑うのよ、ニヤッて、眠ったまんま……何で？
睦子 嬉しかったんじゃないの、直してもらって。

冴子 背筋がゾツとしたわよ、それ見た時は。

睦子 ……。

冴子 マスクなんかして、あれで何かこんな変な帽子でもかぶって、

サングラスでもしたら、まるで通り魔じゃない。

睦子 ……。

冴子 夜中に目さましたら隣で通り魔が鼻。ピーピーいわせてたなんてなったら、

あんたどうする？ 私だったらその場で金しぼりになっちゃう、キューって。

睦子 ……帽子かぶって寝るわけじゃないんでしょ。

冴子 時々ね、ネットかぶるのよ。昔からやってたんだって。頭が立っちゃうのよ朝、

髪の毛かたいから。…ネットかぶってマスクすんの…

睦子 いいじゃない、それぐらい。

冴子 それで、何着て寝ると思う？ 私が買ったパジャマ着て寝たのは初めの頃だけ。

浴衣着て寝るのよ、冬でも。

だけど寝相が悪いもんだから、裕衣がぜんぶ後ろに回っちゃうの。

ヒモは胸のあたりに来てて、それでネットとマスク。想像出来る、どんな恰好だか。

頭の手術してる最中に精神病院から逃げ出した変質者よ、あれじゃ。

睦子 ……。

冴子 朝起きて、必ずトイレに駆けこむの、その恰好で、裕衣なびかせて。

私初めてそれ目撃した時は、目玉焼きのフライパン落としちゃったもの、足の上に。

睦子 ……だって、そのまま外出てくわけじゃないでしょ。

冴子 冗談じゃないわよ、当り前でしょ、そんなことしたら、今ごろ生きてないわよ、二人とも。

睦子 じゃあ、いいじゃない。

冴子 28よ、まだ、それで。

睦子 あんた、それで別れたの……。

冴子 ……まさか。

睦子 ……。

冴子 そんなのは、いいのよ、見ないようにすればいいんだから。……眉毛ぬくのよ。

睦子 眉毛？

冴子 人と話してる時とか、テレビ見てる時とか。

睦子 抜かないと、つながっちゃうとかいうんじゃないの。

冴子 そういうんじゃないのよ。別にもともと濃くてしょうがないとかっていうんじゃないんだから。くせなのよ、食事してる時だって抜くんだから。

睦子 眉毛なくなっちゃうの？

冴子 そんなに抜くわけじゃない、だから一本か二本。

睦子 ……だったら別に気にすることないじゃない。

冴子 テレビ見ててうなづくの。

睦子 ……。

冴子 ドラマとかニュースで、テレビの人がしゃべってるのになんかくじじゃないのよ、内容と関係なく何でもうなづくの。

睦子 ……。

冴子 ……。

睦子

……。

冴子

だから私、一ぺん言ってあげたのよ、うなずいてるって。

睦子

……。

冴子

そしたら、その時は、ああ、とかって言ってやめるんだけど、またうなずいて。

だから私もう言ってもだめだと思って、この間後ろからそーつと行って頭おさえたの。そしたら怒ったのよ、何すんだよって。それでケンカになって……

睦子

……怒るわよ、当り前じゃない。

冴子

なんで。

睦子

だって、後ろから頭押さえられたら誰だってびっくりするでしょう。

冴子

だって、うなずいてたのよ。それで怒るってことは直そうと思っただけでして、私のことじゃないよ。それで怒るってことじゃない。それまで、そう？ とか、ああ、と

か、いけね、とか言ってたのは全部ウソだったことじゃない。

睦子

……。

冴子

別にだから別れたってわけじゃないけどね。

睦子

……。

冴子

私、やっぱり面接行こう。(新聞の切り抜きしまつて)

イヤなのよ私、こういうの思いついたときにやらないと。電話も入れちゃったし。どお、顔変じゃない？ 口紅もう一回ぬった方がいいかな。

睦子

じゃあ、なんで別れたのよ。

冴子

え？

睦子　なんで別れたのよ。

冴子　……だから、言ったでしょう、性格の不一致。

睦子　そんな理由にならないじゃない。

冴子　……。

睦子　いいじゃない、うなずいたって。

冴子　……何言ってるの。

睦子　TV見てうなずいたって、壁に向かってうなずいたって、いいじゃない。

冴子　あんたも一緒にうなずけばいいじゃない。

睦子　バカみたいじゃない。

冴子　バカみたいよ。いいじゃない、何がいけないのバカみたいで。二人でTV見ながらうな

ずいて、眉毛抜いて、浴衣なびかせて、走り回ればいいじゃない。

冴子　……何言ってるのよ。

睦子　ネットだって二人でかぶって、マスクだって二人ですればいいじゃない。

冴子　二人とも通り魔なら怖くないでしょう、別に。

睦子　……。

冴子　フライパン落としたぐらい、どうってことないわよ。

睦子　私なんか大事な書類、地下鉄の中に忘れて仕事落としたことだっただってあるんだから。

冴子　何言ってるのよ。

睦子　……だから、そんな理由にならないでしょう。

冴子　……そんなこという資格あるの？

睦子 ……

冴子 じゃあ何で別れちゃったのよ。何で成田から帰って来ちゃったわけ、お姉ちゃん。

睦子 ……。

冴子 ヒラオカさん、いいじゃない。

結婚式の時だって、あんた泣いてなかったけど、ヒラオカさん泣いてたじゃない。

ヒラオカさん泣いて、やたらペコペコして回ってたじゃない。

睦子 ……。

冴子 あんた、昔からそうなんだから。自分のこと棚に上げて人にばかり言うんだから。

睦子 ……。

冴子 私、行ってくるから、面接。

睦子 行っただろうすんのよ。

冴子 わかんないわよ、面接だから。

睦子 ……

冴子、バッグからサングラス出し、かけて、バッグもってドアまで行く。

ドアまで行って、思いついて、戻って、

冴子 …… 告げ口なんかしないでね。

睦子 ……

冴子 うちの人に電話して、連れ戻させようなんて、しないでね。

睦子
……

冴子 ……布団、頼んでくるから、帰りに……

冴子、出ていく。

睦子

……さて、と、お茶でも飲もうか。ビーフジャーキー……はカタイから、マカデミアナツツで、……あ、でも、いいかな、その前にここ片付けちゃっても。すぐすむと思うんだ、いいよね。(その辺片付けて)

ええと、じゃあどうしようかな。どうせ今から洗濯は出来ないし。あ、出来るわけないか、洗濯機ないんだから。とりあえず、しわになる服だけこっちに移しちゃうから、あとはもうこのまんま……

……これ、やつぱり大きい方もってって良かったみたい。それでもおみやげあふれちゃってさ、もう帰りのリムジンで大変……

睦子、電話しようかどうか迷う……。

やめる。

クローゼットへ、服片付けつつ。

睦子

帰りのリムジンでね、一人で荷物かかえて一番後ろの席に行きたくて。ガラガラひきずってたらキャスターが一つこわれちゃって。運転手さんが手伝いしましょうって言ってくれたんだけど、私、「いいです」とかことわっちゃって……

ドアが開いて、冴子、戻ってくる。

テーブルへ。

座って、鏡出して、自分の顔ながめる。

冴子

……

どうしたの。

……

面接、行かなかったの？

……

冴子

冴子、化粧ポーチからガーゼ出して、顔ぬぐい始める。

冴子

私、帰るから。

睦子

どこに？

冴子

決まってるじゃない。

睦子

……

冴子

信じられない。今電話したら、あの人が飲みに行ってるのよ、近所のスシ屋に。メッセー
ジ残して。私が出て行ったことぜんぜんわかってないの。冗談じゃないワヨ。手紙まで
置いてきたのに、読んでないのよ、あの人が。私、ホントだめなの、あの人のそういう
所。

冴子、化粧ぬぐうと、カバン、バッグ持って。

冴子

……じゃあ。

出て行く。

睦子

……どこまで、話したっけ。ええと、そうだ、リムジンバスに乗る所だっけ。トランク
のキャスターがこわれちゃって大変だったのよ。バスの中、入口から一番後ろの座席ま
で行くのに十分もかかっちゃって。……十分ってことはないか。トランクなんか始めか
らバスの下に入れてもらえば良かったんだけど、何か荷物ぜんぶ持っていたくて……何
だろう。

それで一番後ろに乗ったら、バス、ガラガラ。だったら別に一番後ろじゃなくてもいい
んだけど、でもいいのよね、あのバス、一番後ろが一番高いから景色よく見えて。

あれ不思議なカンジよね、旅行から帰ってくるのって、昨日まで知らない所にいたの
に、だんだん知ってる所に帰って来ちゃうのって変な気分なのよね。

バスの中でね、いつも見てる景色に一つ一つ気がついて……。

電話鳴る。リーン、リーン、

留守電になって、

「はい、ただいま留守にしております。

ご用の方は発信音のあとにメッセージをお残し下さい……」

ピー……

睦子

……

声

「あの……もしもし……」

睦子

……

声

「もしもし……、ええと、ヒラオカです。」

睦子

(電話には出ずに)……はい。

声

「それで、あの……飛行機の中でやった、クイズのことなんだけど……」

睦子

……

声

「カフェオレ、と、墨汁と、恋愛とって……」

睦子

……。

声

「あれ、あの……あのあとずっと考えてたんだけど……」

睦子

はい……

声

「それで、あれ、もしかしたら、カフェオレのオレと、墨汁のボクと、恋愛のアイで、

睦子 あの……」

睦子 ……
声 「アイは多分、英語のアイじゃないかと思うんだけど……」

睦子 ……
声 「だからあの、一人称っていうか、私のことっていうか……」

睦子 ……
声 「そういうの呼ぶときに使う言葉が入ってるんじゃないかって、考えたんだけど……」

睦子 ……
声 「それでいいのかどうか……」
睦子 ピンポン。

睦子 ……
声 「……あれ？ 何だこれ、カードが……つながってるかな まだ？」
睦子 つながってます。

睦子 ……
声 「もしもーし、大丈夫かな？」
睦子 大丈夫です。

睦子 ……
声 「切れてたらごめんなさい。」
睦子 切れてないです。大丈夫です。

睦子 ……
声 「ええっと、それから、あの、キャベツとニンジン、どっちが柔道って奴なんだけど。あれは多分、ニンジンだと思うんだけど。なんでかっていうと、一本、二本って数えるからだと思うんだけど。それからあの、いいかたつむり、悪いかたつむりって奴は、いいってあの、はじめに言ったらいいかたつむりで、何も言わなかったら、あの……」

睦子、電話見つめている。
暗転。

第三話 部屋。

同日、夜。

ピンポンとドアベル。

毛布にくるまっていた男（21ぐらい）。

ガバツと起き上がる。

男

……マルコポーロ！（しばらく考えて）あれ？……何だ？ 頭いたい、あ、頭ガンガンする、吐く吐く……ウプ……ヤマダ、吐きそう、ヤマダ、ウプ……セーフ。

（再び毛布にくるまるが）ああ、ダメ、横になるとダメだ。（座る）ああ、座っても気持ち悪い、（立って）立っても気持ち悪い、（歩いて）立っても座っても歩き回っても気持ち悪い。気持ち悪い、って言ってると余計気持ち悪い。

（足下にある酒ビン見つけて）……あれ、何だこれ？ また、飲んだのかよ、昨日帰ってから。

昨日、いつ帰ってきたんだっけ？ 今日か？

明るかったような確か……（寝ていた所の枕元を探して、腕時計を見つける）

9時、どっちの？（あたり見回して）朝……の訳ないか、

ヤマダ、昨日どこ行ったんだっけ。サトウん家で待ち合わせて、ナカムラが遅れて来て、……先週だよそれは……。一週間飲み続けてたのか？ まさか。

ナカムラは、いなかったよな、昨日は……。

ナカムラ、どうしたんだっけ、あいつ確かバイクで事故って、
(酒ビン) これ、お前買ったの……ヤマダ。(ヤマダの布団めくる)
(誰もいない) ありや、今日、仕事か、あいつ……
(初めて部屋の中見回して) 引越したのか……

と。ピンポーン。

男
マルコポーロ……って何だ？

ピンポン。

男
山田、か。

ピンポンピンポンピンポンピンポン。

男
……(玄関へ)……あの、どちらさま？

声(平)
ああ、ピザ屋ですけど、ピザ持って来ました。
男
ピザ？……

ドア開ける。

平ヤスシ（38）サラリーマン風の男、背広姿、アタッシェケースを持っている。

あ、どうも、あんた山田さん？

あ……いえ……

あれ！？ 山田さん、いる？

いえ……あの……

（身入れて）山田さん、もしもーし。

……。

ちよつと大事な用事があるんだけど、山田さんに。中で待たしてもらってもいいかしら。

ええ！？

はい、ピザ、あんたとったんでしよう、ピザ屋が外でウロウロしてたから、かわりに持つて来てあげましたよ。（入って来て）

……あの。

ああ、大丈夫だから、決して怪しい者じゃありません。（名刺出して）こういう者です。

（受け取って）ヒラヤスシ……

あ、こうなってるんだ、中。タイラって読むから、それ。

へえ、こういう造りでね、成る程、いい部屋じゃないの、厚いねカベも、隣の音とか気にならないでしょう、これなら。いや、私、前に住宅関係の会社にいたことがあるからわかんよ。

山田さーん、(返事待つ) …… (ない)

…。

あ、悪いけど、それ返してくれる、名刺、ごめんね。今丁度切らしてて、一枚しかなくて、今度また持ってくるから。

…。(返す)

さてと…。(男ジロジロみて) …… (布団見る) なんだ、寝てたの…。

ああ、あんた学生さん、(酒ビン見て) いいな学生さんは、顔色悪いよ、二日酔いだ、いい薬あるけど、飲む？

あ、いえ…。

そう、これ(布団) たたんでいい、座るとこなくつてさ。

あ、ああ。

ああ、まかしてよ、俺、昔、布団のセールスやったことあるから、慣れてんのよ扱いは。(匂いかいで) ああ、ほさなくちゃダメだな、これは。

…。

あんたはさ、山田さんの友達？

え？

一緒に暮らしてんの？

いや、そういうわけじゃ…。

…。ここ、山田さんの部屋でしょう。

…。多分。

平 多分……何よ、多分って、

男 いえ、あの……

平 ……あ、なーんだ。

男 なーんだ？

平 あんたが山田さんだ、……そうでしょ。

男 ……違いますよ。

平 (背後にいる誰かに) おい、どうなんだよ。

男 え？

平 こいつか、山田は。

男 ……あの、誰に(言ってるのか)

平 (後ろ見る。誰もいない) あれ！？ あのバカ。

平、外へ。

平の声 あ、てめえ、またそんなものやりやがって、今買ったのか、

女の声 うわ、くせえ、何考えんだおめえは。

平の声 アミーゴ！

女の声 アミーゴじゃねえ、立て、このバカ。

ヤス、女の手、ひっぱって入ってくる。

女、春日マユミ（18）。サングラス、ウオークマン、片手にウーロン茶の空き缶。
エヘラエヘラしている。

平 しっかりしろバカタレ。こいつか、山田は。

男 ……。

マユミ ……う、……あ？

平 どうなんだよ。

マユミ アミーゴ（倒れる）

平 あ、ダメだこりゃ、完全にいつてるよ。ちよつとあんた手伝つてよ。寝かすんだよ、そこに、毛布とつて毛布……

男 ええ！？

平 ええじゃねえよ、足持つて、足、……俺の足持つてどうすんのよ。

男 ああ……

マユミ エヘラエヘラ……

平 エヘラエヘラすんじゃねえ、シャキツとしろシャキツと、マユミ！

マユミ シャキ、シャキ……

平 バカタレが。

マユミ ……アミーゴ。

二人、マユミを寝かせる。

男 平 男 平 男 平 男 平 男 平 男 平 男 平 男 平 男 平

……たく、こりや当分動かせないよ、まいったな、こりや。こんなことないんだけどね、普段は。

……

タバコ、くれない？

え？

タバコ、切らしちゃったんだよ、今。

いや、あの（ポケットさぐったり、その辺搜したりする）

何だよ。

やめた、のかな……（まだ探す）

……いいよ、もう。

……。

で、どうなんだよ。

ハ？

ハ？ じゃないよ今さら、わかってんだろう、見覚えがないなんて言わせないからね。

？（と、平を見つめる）

俺じゃないよ、こいつだよ。

ああ……（女見て）……外人？

外人！？

いや、メキシコの方の言葉しゃべってたから。

男 平 男 平 男 平

これだよ。
……これだったって……
どこ見てんのよ、あんた。鼻覗いてどうすんのよ、目の横でしょう、アザは目？
目だよ。
これ？

平 男 平 男 平 男 平 男 平

どこの世界にマユミってメキシコ人がいるんだよ。
源氏名かと思つて。
あんた、人のことナメてんの。
まさか。
いい度胸してんじやない。まあ、スナックで人の彼女、ブン殴るくらいだから、それなりの度胸してんだらうとは思つてたけどね。
殴つた！？ 俺が！？
おたくが殴らなくて、どうしてあんなアザがつくのよ。
アザ……
ちよつと見てみるよ。

平、男の肩つかんで、マユミの枕もとへ。
サングラスとつて見せる。

平 下の名前だよ。

平 えーと……。

平 えーとって何だよ、えーとって。

平 いや、あの、タローです。

平 タロー、だったら山田じゃないの。

平 違いますよ、だって、俺……

平 あんた、どういう人間。

平 どういうって……

平 俺はさ、あんたに金払えとか、おとしまえつけろとか、そんなこと一つも言っていないの

平 よ、まだ。

平 まだ？

平 まだって、だからそういうイミじゃねえよ。

平 ……

平 そうか、あんた俺のことヤクザだと思ってんだ。冗談じゃないよ、ヤクザだったら、こんなおだやかな話にならないですよ。事務所に連れ込まれて、こづき回されて、借用書にハンコつかされて、サラ金地獄だよ。あんた、そういうのがいいワケ。

平 ……そんな。

平 いいんだよ、だから、俺はヤクザじゃないんだから、カッコみりやわかるでしょ。このカッコ、ごく普通の会社員ですよ、いやになっちゃうな全く。

男 でもオレ、違うんですよ、ホントに。

平 じゃあ、山田はどこよ。

平 いや、……だから。

平 だから何？

平 それはわかんないけど。

平 だからね、わかんないって、それじゃ通らないでしょ。山田さーん、ついたらアンタがドア開けて、あんたはこの部屋で一人で寝てて、他には誰もいなくて、だけど山田がどこ行ったかもわかりませんって、どこの世間でそういうの通用すると思ってるの、認めませんよ、誰も、そんなこと。

平 だけど、ココ、ヤマダの部屋かどうかもわかんないし。

平 何だって。

平 だって、これ……

平 あんたが山田のヘヤだつたんじゃないの、さつき。

平 でもホラ、この部屋見てよ、あいつ引越したんじゃないかな。

平 おい！！

平 ……

平 おい、冗談じゃないよ、あんた、とんでもないとぼけ方するねえ。ピザはとるけど、女を殴った責任はとれませんか。

平 でもテレビもないから。

平 テレビがなんだよ。オレんちだってNHKが来りや、テレビぐらい隠しちゃうよ。
……。

男 平 男 平 男 平 男 平 男 平 男 平 男 平 男 平 男

平 男 平 男 平

平 第一あんた、当のあんたがそこにいて、引越したも何もないもんだと思わねえか。

平 いや、だから、それは、ヤマダが……

平 よし、わかった、もういいや、めんどくさいことはやめな。あんた山田でも誰でもいいから、とにかく認知だけしてよ。(とマイクロカセット出す)

平 何ですか、それ。

平 だからさ、これに向かつて「私、山田……」山田じゃねえのか、いいよだから誰でも。

平 「私、何のたれべえは、確かに春日マユミ……」こいつのことね、「春日マユミを殴って目にアザをつくりました、認知」って、それでそのあとに今日の日付入れてくれればいいから、いくよ、はい、キュー。(スイッチ押す)

平 ちよつと待って下さいよ。

平 (スイッチもどしながら) 何言ってるんだよ、あんた、だめだよ。関係ないことふき込んでしまったじゃないの、ああ、せっかく頭出しといたのに。(テレコ巻き戻して、あけて、頭出し) 面倒くさいんだよ、これ。

平 いや、だから、飲みには行きましたよ。

平 ホラ見ろ。(とスイッチ)

平 だから、ちよつと待って下さいって、確かに昨日……あの昨日かどうかよくわかんないんだけど、確かに、ヤマダとあと二、三人で、二、三人かな、二、三人だと思うけど、それで、まず居酒屋行こうってことになって……あ、違う、はじめはバッテリーセンターだ、バッテリーセンターに行こうってことになって、そしたら、タイスケって奴がね、ボールをこう頭にぶつけて……あ、違うわ、バッテリーセンターは閉まってる

男 平 男 平 男 平 男 平 男 平 男 平 男 平 男 平 男 平 男 平 男

いや、パブはね、開いてたんだ、でも女の子がなくて、屋上の金網が壊れてて……
ああ？

あれ。

何で屋上の金網が出てくるんだよ。

何でだろう。

屋上のパブかよ。

そうかな。

ビアガーデンだよ、それは。

ビアガーデンかな。

それで、どうしたんだよ。

女の子がいなくて。

聞いたよ、それは。

それで、ソージのオバさんナンパして……

ホントかよ。

いや、それは冗談。

コノヤロー！

それでどうしたのかな、場所変えようって、別のパブ行って、また女がいなくて、ヤマ
ダがカフェバー知ってるとかって言って、ヤマダかな、タイスケが言ったのかな。

タイスケは病院だろうが。

じゃ俺が言ったんだ、俺がカフェバー行こうって言って、それで今度はカフェバー行っ

平 男 ……マルコポーロ？

平 男 そうだよ、そこでお前は、何が面白くてなかったのか知らんけど、いきなりブン殴ったんだよ、こいつが尾崎豊の「卒業」唄おうとしたら。

平 男 ……あ。

平 男 ホラ、見ろ、思いだした。

平 男 いや、それ、いつもヤマダがリクエストする奴だから。

平 男 だから、その山田ってのがお前なんだよ。一人で飲みに来てたって言ってたんだから、スナックのマスターも。

平 男 一人で……。

平 男 そうだよ。

平 男 ……

平 男 どうだ、見ろ、まいったか、自ら墓穴を掘りやがって。

平 男 ……

平 男 で、どうすんだよ。

平 男 どうするって。

平 男 するんだろ、認知、はい。(スイッチ)

平 男 あの、俺、ホントにヤマダですか。

平 男 やめてよ、もう、そういうの、またふき込んだじゃったよ。

男、マユミのところ行って、上半身かかえ起こして、激しくゆさぶって、

男
ねえ、あんた起きてよ、オレ、ホントにヤマダって言ったの、スナックで。

マユミ、カクカクカク。

平 男
あ、バカ、止せ、何てことすんだケガ人に。
ケガ人？

平 男
そうだろう、お前が殴ったんだから。
でもシンナーくさいけど。

平 男
いいじゃねえか、シンナーぐらいやったって。やりたくもなるだろう、そのぐらい。それとも何か、シンナーくさい奴は殴ってもいいってことになったのか、今度の国会で。だったらお前、ペンキ屋なんかボコボコだよ。

平 男
あんたはいなかったんですか。
どこに。

平 男
だから、そのスナックに。
いなかったよ、いたらお前、ほっとくわけねえだろう。

平 男
マスターは、何て言ってるんですか。
何だよ、お前、何でお前が俺に聞くんだよ。

平 男
マスターはいたんですよ。
だから、マスターも席はずしてたんだよ、便所行って、それで帰って来たらこいつが

のびて、カウンターで一人で飲んでたお前がいなくなってたんだよ。
他にお客は。

いねえよ、いねえからお前が犯人なんだろ。そんな時にはもう、こいつ青タンこしらえて
たんだから。

でも、どうしてそれが山田だって。

お前が言ったんだろ、マスターに、オレは山田だって。家はどこで、何してて、なめん
じゃねえ、冗談じゃねえとかつって、クダまいてたらしいぜ、悪い酒だよ。

……

さあ、もういい加減にしてくれよ。つかれちゃったよ、俺だって。(首コキコキ)

オレはね、あんたのためを思って言ってるの。いいんだよ、出るところ出たって。

そうしたらキズつくのはアンタでしょ、あんたの前途でしょ、ええ、学生さん。就職に
だって響くし、親御さんだってそりゃあ心配するんじゃないの。どうすんだよ、そうし
たら。

……いいっすよ、入れましようか。
え。

なぐったって、言えばいいんでしょ。

いや、そう投げやりになられても困るんだけど。

俺が山田ってことで、ふき込めばいいんでしよう、いいですか、俺は山田ですけど……
ちよ、ちよっと待て、コラ。(テープあわててセット)
何してるんすか。

男 平 男 平 男 平 男

平 男 平 男 平 男

ああ、変なとこ押しちゃったよ。

いいすか。

ちよつと待って、お前何言うかわかってんのかよ。

だから、俺が山田で、この人殴って、それについては山田に責任があつて、そういうことでしょう。

……お前、そういう言い方はないんじゃないの。

じゃあ、どういう言い方ならあるのよ。

……ちよつと待て、お前、ホントに山田か。

何言ってるの、今さら。

だつておかしいじゃねえか、さつきまではよ、ああでもないこうでもない言つてて。

……思いだしたんですよ、証拠ありますよ、見せましょうか。

シヨウコ！？

(ポケットをさぐる。その辺さがす。胸に手をあてる。首から認識票とつて) ホラ。

……何だよ、これ。

見て下さいよ、書いてあるでしょう、ちゃんと、生年月日と名前、血液型と、それから本籍地も。こういうこともあるかとね、作つたんですよ、それ。

ホントかよ……

間違いないでしょう、それは。

何か気にいらねえなア。

じゃあやめましょうか、いいすよ、俺はやりたかないんだから。

平 待てよ、これホンセキって何だよ。
男 ホンセキったら、実家でしょう。
平 親がいる所かよ。
男 普通そうでしょう。
平 (メモ出して、写して) ……さてと、じゃ、やるか。テープはOKか。
男 やめるんじゃないかなったんすか。
平 お前がやるつつつたんだろ。
男 そうですよ……
平 ……じゃあやろうよ。
男 いいですよ。
平 ちよつと待てよ、キュー出すよ、ちゃんと。
マユミ (寝たまま) ……アミーゴ。
平 ……
男 ……
マユミ アミーゴ……
男 何か言ってますけど。
平 (マユミに) 黙ってるお前は。
マユミ ……アミ……
平 だまってろつつつてんだよ!!
マユミ ……

平 (男に) いいのか？
男 え？
平 いいのかよ、いくぞ。
男 ああ、どうぞ。

とマユミ、起き上がる。

平 何やってんだよ！
マユミ トイレ！
平 トイレエ？
マユミ トイレ……
平 (男に) トイレだと、どこ？
男 トイレ、トイレはええっと、多分そっち。

マユミ、行く。

平 ……
男 どうしたんすか、いいんですか。
平 ちよっと待て。……お前やっぱ山田じゃねえな。
男 何なんですか。

平 男 平
お前、手前の家の便所、多分そつちなんて言うか。

……

平 男 平
そうか、読めた。お前、山田をカタツたな、昨日、店で。それで、やりたい放題やって
トンズラこくつもりだろ、ふてえ野郎だな、このヤロー。

平 男 平
何言ってるんですか、見せたでしょ、これ（認識票）。

平 男 平
そんなもの、いくらでも作れるじゃねえか、山田から盗んだのかもしれないよ、落ちた
の拾ったのかもしれないし、そうか、その辺だな。お前、どこで拾った。

……いいじゃないすか。

何だ？

男 平 男
いいじゃないですか。あんだだつてその山田ゆするつもりなんだから。オレが山田の声
でふき込んであげますよ、あいつどんな声だったか、アー、アー。

このヤロ……

平 男 平
早くしないと、とりっぱぐれますよ、あいつはもういないんだから。

……いない？

平 男 平
どっちにしても、もうとれねえか、本人からは。

平 男 平
いないって、どういうこつたよ。

平 男 平
いない？ いますよ、多分まだ、マサキビルの裏庭に。

何だ？

平 男 平
ああいうの、やっぱいるつつつていいのかな、やっぱいないつつうのかな……

何言ってるんだよ、お前は。

男 飛び降りたんですよ、ヤマダ、マサキビルの屋上から、昨日。

平 とびおりたア。

男 金網のこわれてる所くぐって。

平 ……ちよっと待て、お前、そのマサキビルってのはスーパーか何かなのかよ。何階あんだよ。

男 十二階。

平 ……お前、だったら助かんねえじゃねえのか。

男 助かんないですよ、あたり前でしょ、そんなの、だからいないつつつてんですよ。

平 ……お前、ホントーの話か、それは。

と、トイレから唄声。

マユミ (ルイ・アームストロングの「この素晴らしき世界」を唄う)

平 あのアマ(トイレへ)

(トイレから) てめえ、何本買ったんだマスターから、いい加減にしろ、またブン殴られてえのか。

マユミ (唄う)

平 このバカアマ。

殴ってるらしい音。

ややあつて、静かになる。

平

(出て来て) まあ、どっちにしてもだ、もういいよ、山田のことはよ。お前が山田だろうが、山田のカタリだろうが、本当の山田が死んでいようが生きていようが。とにかくマルコポーロでマユミを殴ったのはお前つてことだよ、そうだと、何やつてんだお前。

男、クローゼットのあたりを何か捜し回りながら、

オレ、あいつに金貸してたんですよ。

ああ？

男 平 男

パソコンのバーゲンがあつたとかつって、それをあのヤロー、いつも返す返すつてウソばかりつきやがって、返しやしないすよ、だから、飲みに行った時に、ナカムラやタイスケ呼んでみんなでつき上げようつてことになって……。そしたら山田の奴、俺はもうカード破産したから、お前らにも金は返さなくていいなんていいやがって。

おい、ちよつと待て、その前にはつきりさせとこうぜ。

またウソついてると思うじゃないですか、そんなの、夜逃げだ夜逃げだなんつてるクセにカードで新しいチノパン買ったたりする奴なんですから。だから昨日は、だったら命がけで証明しろつうことになって、みんなで屋上行つて……

ちがうな、サトウは帰ったのか。タイスケは、タイスケは病院行つて、ナカムラはバイクが事故つて……

平 ……お前、まさか、お前が突き落とされたのか。

男 冗談でしょう、なんで俺が突き落とさなくちゃいけないんですか。俺は金貸してるんですよ、あいつに、3万も……2万か。

平 お前、そんな金の為に、人一人殺したのかよ。

男 俺は何もしてないですよ。あいつだって冗談だったんだから。

平 冗談？

男 冗談ですよ、あのヤローは人生が冗談なんですよ、わかってないんですよ、大事なことが何なのか、まるでわかってないんですよ。そんなんでこの先やってけると思いますが、冗談じゃないですよ。キレてんですよ、あいつの頭の中どっか、いつつもニヤニヤ笑ってやがって。

昨日だって、俺が止めると思ってたんですよ、あいつは。わざと金アミの下くぐって、これはカタミだとかつって、あのヤロー、ニヤニヤ笑って……笑ってたかな。

マユミ、トイレから出て来て、

平 おい、何やってんだ、どこ行くんだお前。

マユミ 帰る。(玄関へ)

平 どこへ。

マユミ 故郷(クニ)。

平 故郷って、おまえ、今から北海道までどうやって帰るんだよ。

マユミ 歩く。

平 海はどうすんだ海は。

マユミ 泳ぐ。

平 てめえ、しっかりしろ、おめえは殴られたんだろう、こいつに。俺はおまえの為にやっ
てんじやねえか！ 待て、な、もうちよつとだから、俺だつて明日会社あんだから、そ
んなに遅くまでいられないんだからよ。

マユミ ……

平 (男に) どうなんだよ！ あれ、どこいった、てめえ。

男、ロフトの上にいる。そこら辺を捜している。

平 何やってんだ、お前は、バカヤロ。

男 ええ！？

平 バカ、やめろ、そんな所から飛び降りたって死にやしねえぞ。降りてこい、このヤロ、
気がいい。

男 何いってんすか、何で俺が飛び降りなくちゃいけないんすか、山田でしょ、それは。

平 いいから降りてこい、てめえ、10数える内に降りて来ないとブツ殺すぞ。

10、9、8、7……

男 あのヤロ、ぜったいウソついてんですよ、夜逃げなんかするわけないんすから、あいつ
がぜったいどつかに荷物かくしてるに決まってるんですよ、オレが貸した金であいつパ

ソコン買ったんですから。

平 うるせえ、降りてこい、10、9、8、

マユミ (「この素晴らしき世界」を唄う)

平 黙ってる、お前は。

男 あー、頭いてえ、ちくしょう、ヤマダ！ バカヤロ、どこ隠した。

平 10、9、8、

マユミ (唄い続ける)

平 だまってろつ、このバカタレ。

男 ヤマダ……、ヤマダ……

平 おりてこい、気ちがい、10、9、8、7……

急速な暗転。

第四話 部屋。

同日、深夜。

突然、ドアが激しく開かれて毛糸の帽子を目深にかぶってサングラスをした男、マサミ(27)、飛び込んでくる。手には黒い紙袋。

興奮して部屋の中を歩き回る。ドアから外をうかがう。また歩き回る。

マサミ クソ、何なんだよ、何なんだよ俺は、ちくしょう、

外で犬の吠え声。

窓から外を窺う。

サングラスをしていたことに気づいて、はずす。帽子もとって投げる。必死で落ち着こうと努力する。出来ない。

タバコ出して火をつけようとする。

手がふるえている。

マサミ 二度とやんないぞ、こんなこと。

火、つかない。

マサミ ああ、もう！

火ようやくつく。ふるえる口から煙りはき出す。

何度も口をぬぐう。タバコ消そうとして灰皿がない事に気づく。

キッチンへ、灰皿とつて来る。タバコ消す。

テーブルの上の紙袋、気になる。

またタバコに火をつけようと、止めて、

紙袋をひつつかんで、クローゼットの中に、

テーブルに座る。すぐ立ち上がって、

クローゼットから紙袋出して、テレビ台のボックスへ。

タバコに火つけて、すぐ消す。服をぬぐ。

マサミ さあ、寝よう。

キッチンへ行って、すごい勢いでうがいを三回。

タオルで首のあたりふきながら出てくる。

ロフトへ、布団かぶる。

ラジオつける。ラジオ消す。

起き上がる。下へ。

紙袋を入れたボックス気になる。

いっちにいい、と体操などする。

気になる。ボックスから紙袋取り出す。テーブルへ。

テーブルの上に紙袋置く

キッチンへ。

水音。

ティッシュの箱、わきにかかえ、ティッシュで顔ぬぐいながら出てくる。

ティッシュ置いて、

紙袋から取り出したのはセーラー服。

少しあたりを気にして、匂いをかぐ。

パンツの中にシャツをたくしこんで、セーラー服の上着、あててみる。

スカートをとって、あててみる。

上着をテーブルに置いて、スカートに足を入れる。はく。ホックを止める。

と、ガチャとドア開いて、タツヤ(27)。

タツヤ おーい、起きてんだろ、カギまたポストの下に落ちてたぜ。

何やってんだよ、お前、部屋ん中暗くして、(電気つける)タコヤキ買って来たぜ。

(キッチンへ)しかし、どうにかならねえか、あの犬は、(キッチンの電気つける)

マサミ いいいいい 犬?(あわててセーラー服ぬいで、まとめて紙袋へ、紙袋をボックスへ)

タツヤ (キッチンから) 犬だよ。

(冷蔵庫開ける音) 何だよこれは、相変らずゴチャゴチャ色んなもん買ってやがんな、いいんだよ今はコンビニあるんだから、不経済だろ返って、

そのわりにロクなもんねえじゃねえか、ビールないのか、買い置きしとけよビールぐらい(冷蔵庫しめる)お前、又、庖丁冷蔵庫に入れてんぞ、いい加減にしろよ、

この変なクセは、(牛乳パックとチーズか何か持って出て来る) 何やってんだ、お前。マサミ いやあの何か着る物が、

タツヤ いいよ、気にすんなよ、今日はつれて来てねえからよ、マサミは。

マサミ ええ!?

タツヤ だから、女の方のマサミだよ、まぎらわしいんだよ、何、考えて女の名前なんかつけたんだ、お前の親父は、……何ウロウロしてんだよ、座れよ、落ち着かないから。

マサミ いやあの、俺、何か着るもの、寒くて寒くて。

タツヤ 寒いか? 今日、(チーズ切ろうとして) 見るお前、庖丁くつついちゃって、

切れやしないよ。しかし何だったんだろうな、あの犬は、俺のこと目の仇にしやがって。お前知ってんだろ、あのコンビニのならばの、

わかんねえよ俺は、犬の気持ちと女の気持ちは、あれ、お前にはなついてたのか?

マサミ え? 犬?(ボックスの上に座る)

タツヤ お前、どこ座ってんだよ、こっち座りゃいいだろ。

マサミ いや、俺こっちの方が落ち着くから。

タツヤ タコヤキ買って来たんだよ、食うだろ。

マサミ ええ、

タツヤ タコヤキ、

マサミ ああ、でも俺、ホラ、寝る前に物食うと。

タツヤ なんだよ。

マサミ 犬がどうかしたのか。

タツヤ 明日の新聞みりゃわかるよ、それともテレビのニュースか、おい、テレビつけろよ、

巨人どうした、あれ、お前、テレビどうしたんだよ。

マサミ あるワケないだろ

タツヤ 何で。

マサミ 持ってたじゃないの、お前がここ出てく時。

タツヤ ああそうか、だってお前、お前が持ってけっていうからだよ、ビデオはどうした。

マサミ それも持ってたじゃないの、ビデオだけあったってしょうがないからって。

タツヤ お前がもたせたんだろ、そうか、じゃあまだ開けてねえダンボールの中に入れてんな。

マサミがよ、マサミってお前じゃなくて女の方な、マサミがいやがって、

みんなお前からもらったものしまっちゃうんだよ、押し入れん中に。

マサミ ……

タツヤ でもお前、すぐまた買うのかと思ってたよ。

マサミ いいんだよ、テレビ嫌いだから、俺。

タツヤ あ、そう、じゃしようがねえな、よいせ、(と席に移って)ダメだよこのイスはケツが痛くて、あれどうしたんだよ、お前作ったじゃねえか、このイス用になって、クッション、緑と青のペアで、俺がタバコの焼けこげ作ったら、泣いて怒った奴、まさか俺あれは持ってたねえだろ。

マサミ 捨てたよ。

タツヤ ああ？

マサミ 捨てた。

タツヤ 何で？

マサミ 俺も作ったんだよ、焼けこげ。

タツヤ 作り直しゃいいじゃねえか、お前あん時も作り直してただろう、おれにあつけて、徹夜で、そうか、あてつける相手もいなりや作り直すこともねえか、

これよ、タコヤキ冷えちまうな、もったいねえな、冷えると

食えねえだろ、とっといても、冷凍しとくか、できねーか、タコヤキは冷凍……

お前、迷惑か、迷惑だったら帰るぜ。

マサミ ……いいよ、別に。

タツヤ 迷惑そうだな、寝る所だったんだろ。

マサミ どうせよく眠れないんだよ、ここん所。

タツヤ なんて。

マサミ なんてってこともないけど、疲れてんのかな。

タツヤ じゃあ、お前、ちよつと下のコンビニ行ってビール買ってくるか。

マサミ ええ！？

タツヤ お前、飲まないからだよ、眠れないのは、少しぐらい飲むのはいいんだぜ、体にはマサミ やってないだろ、下は、ビールは。

タツヤ 何で、

マサミ 何でつつたって……

タツヤ じゃあ、この辺どこやってるんだよ。

マサミ どこもやってないよ。

タツヤ 自動販売機があるだろ。

マサミ 全部売り切れになってるよ、とっくに。

タツヤ そうか、一カ所ぐらいやってる所あればいいのにな、この辺で、ビール売ってる所……

お前本当は知ってるんじゃないの。

マサミ 何言ってるんだよ。

タツヤ だって、お前、くわしいからさ、この辺には。

マサミ 知らないよ。

タツヤ けっこう夜中に隠れてビール買ってきたりしてな。

マサミ 何でそんなことすんだよ。

タツヤ そうか、お前、飲まないんだもんな、飲まないからだよ、眠れないのは。

マサミ お前、何だよ、さっきの話。

タツヤ 何、さっきの話って。

マサミ 犬が明日新聞のるとか、テレビ出るとか。

タツヤ ああそれな、あとで話すよ。お前、こっちに座んない。

マサミ 何で。

タツヤ 遠いだろ話が、来いよ。

マサミ いいよ。

タツヤ 来いって、俺、コンタクトしてないんだよ、今日、(マサミその場で下に座る)遠いな、

飲むだろ。(牛乳パック)

マサミ いらない。

タツヤ 遠慮すんなよ、お前んだろこれ。つまんないよ俺一人で飲んでても。

口つけるだけでもいいから、付き合えよ。(マサミ立ち上がる)どこ行くんだよ。

マサミ コップ。

タツヤ いいじゃん、ここから飲めば、知らない仲でもないだろ。

マサミ いいよ、コップあるんだから。(キッチンへ)

タツヤ 水くさい奴だな、けどこの部屋ホント広くなったよな。物なくなつて、

かえつてさっぱりしたろ、いつだっけ、俺出てつたの。

マサミ (帰って来て)ミソカ、先月の。

タツヤ ミソカって、お前、おもしろい物の言い方するな。

マサミ おかしいかよ。

タツヤ 別におかしくないよ。おもしろいって言ったんだろ。

迷惑か、俺来ると、迷惑だったらそう言えよ。

マサミ 言っていないだろ、そんなこと。(牛乳二つのコップに注いで)

タツヤ マサミがさ、マサミって女の方のな、……しかしポイントまぎらわしいよな、

お前の親父さんどうしたんだ、お前のこと、女だと思ったのか。

マサミ 字が違うだろ。

タツヤ 字、違うのか。

マサミ 俺のマサミは、ミがへびだよ。

タツヤ へび！、お前、へびだったのか！？

マサミ 千支だよ、千支がへび年。

タツヤ 時々、脱皮したりするのか。

マサミ お前だって、へび年だろ。

タツヤ ああ、そうな、同い年だもんな、俺、不思議だったよ、

学校で同じクラスの奴がほとんどへび年だった時は、なんて学校だと思っただぜ。

(マサミがチーズに手をのばしたのを見て)あれ、お前、寝る前に物食っていいの。

マサミ いいよ、まだ寝ないから、

タツヤ おれのせい？

マサミ そうじゃないよ、いいよ別に。

タツヤ だったらタコ焼き食えば？

マサミ あとで食べるよ。

タツヤ あ、そう、で、何の話だっけ、ああ、千支の話な、

あれおれ何回やっても自分の千支出てこないんだよ、何か変なんだよな、

お前、十二支ちゃんと言える？

マサミ 言えるだろ。

タツヤ あ、ちよつと言ってみてくれよ。

マサミ いいよ。

タツヤ なんだ、お前も言えないのか。

マサミ 言えるよ。

タツヤ じゃ、ちよつと言ってみるよ。

マサミ なんで、いいよ。

タツヤ 恥ずかしがることないだろ、ちゃんと言えるんなら立派なもんじゃないの、

自慢していいよ。

マサミ 別に大したことじゃないだろ。

タツヤ 大したことだよ、じゃ俺言ってみつか、言えないから。

(指折って)ネウシトラウウマヒツジサルトリイヌイ

ほら10コしかねえだろ。

マサミ ええ？

タツヤ ネウシトラウウマヒツジサルトリイヌイ10コだろ。

マサミ 抜けてんじゃねえか？

タツヤ どころが、ネウシトラウウマ

マサミ そこだろ。

タツヤ どこ。

マサミ だから、ウとウマの間に入るんだよ、タツミが。

タツヤ タツミ？

マサミ そうだろ。

タツヤ ネウシトラウタツミサルトリイヌイ？10コだぜ。

マサミ 何言ってるんだよ。

タツヤ ネウシトラウタツミウマトリイヌイ？

マサミ 違うって。

タツヤ ネウシトラウウマ……じゃねえんだろ、

ネウシトラウサルトリイヌイ、あれ、また減っちゃったよ。

マサミ ……。

タツヤ ネウシトラウタツミイヌサルキジトリイヌイ？

あれ今イヌが2回出て来なかったか？

ネウシトラウウマサルヒツジヤギサルトリロボトリ、

ぐちやぐちやだよ。

ネウシトラウトラウシトラウシトラ、

マサミ お前、わざとやってんのか？

タツヤ わざと？

マサミ わざと間違えてんだろ。

タツヤ 違うって、ホントにわかんなくなっちゃうんだよ俺。

ネウシトラウ、

マサミ タツミ!

タツヤ トリサル?

マサミ 何でトリが来ちゃうんだよ。

タツヤ キジ?

マサミ いねえだろ、キジなんか。

タツヤ タツ トリか、足が丈夫っていうもんな。

それでウマ ヒツジ ヤギ ヤギってねえか? ヒツジ サル トリ……

違うな、ネウシ トラ ウタツ ミサル トリ……

サル トリ イヌ ネコ ロバ? お前これじゃ、ブレーメンの音楽隊だよ。

マサミ ……お前、何しに来たんだよ。

タツヤ 何しにって、何だよ。

マサミ こんな夜中に、ネ、ウシ、トラ、確認しに来たのか?

タツヤ だから、タコヤキ買って来たんだろ、お前に、待ってたんだぜ俺は、

新しいの出来るまで屋台の前でつつ立って、

マサミ お前、彼女はどうしたんだよ。

タツヤ 彼女?

マサミ いるんだろ、家に、

タツヤ 誰が。

マサミ だから、マサミ。

タツヤ そこにいるのは、どこの誰さんだ?

マサミ だからそうじゃなくて。

タツヤ ああ、女の方のな、あいつ食わねえんだよ、嫌いなんだってよ、

タコとか、イカとか海のもんが、

ラーメンのノリもいちいちとってこれって頼むんだぜ、店に、

それで自分が外人みたいだと思ってるんだからたまんないよ、

あんなノツペリした外人いるか、あいつが外人なら日本人は火星人だよ。

マサミ ……(笑わない)

タツヤ お前、にらめっこ強いだろ。

マサミ ええ？

タツヤ にらめっこだよ、知らないのかお前、やんなかったのかよ子供の頃、

せえの、じゃなくて、アツパツパとかつって、先に笑ったら負けって、

マサミ ああ……

タツヤ 何だよ、知ってるじゃねえか、おどかさなよ、強かっただろ。

マサミ 何で。

タツヤ だってお前、笑わないから、今日俺が来てからまだ一回も笑ってねえんじゃねえか。

もう、つまんねえか、俺といても。

マサミ お前だって笑ってねえだろ。

タツヤ 俺は笑わないよ、強かったもの、にらめっこのチャンピオンだよ、町内の。

あつただろ、お前のところも大会が、町の子供会で夏休みとかに、なかった？

マサミ あるかよ、そんなの。

タツヤ ないのか、めずらしい町内だな、何やってたんだよ、夏休みの子供会は、
マサミ 知らないよ。

タツヤ お前忘れちゃったの、何で忘れちゃうんだよ、そういうこと、

俺なんか昨日あったことは忘れちゃうけど、子供の時の事はやたらに憶えてるよ、
お前、チンポに毛はえたのいつ。

マサミ 何だよ。

タツヤ いったよ、はえたの、教えろよ。

マサミ いいよ。

タツヤ お前、そういうのも忘れちゃうのか、何でもかんでも忘れちゃうんだな。

マサミ じゃあお前はいつだよ。

タツヤ 何が。

マサミ だから……毛がはえたの、

タツヤ 毛？どこに？

マサミ ……

タツヤ ああ、チンポの毛な、俺は遅かったんだよ、中三の時な、アセツたよ、

体育の時、オレより背低い奴が毛のはえたヨコチン出してた時は、

ヨコチンじゃねえか、ヨコダマだな正確には、毛はえてたんだから。

マサミ 何言ってんだよ。

タツヤ 俺、考えたんだけど、あれは構造的な問題だと思うんだよな、

出す奴はいつも出してたもんなヨコチン。お前、ちよつと立ってみ。

マサミ 何だよ。

タツヤ 見てやるから、ヨコチン構造かどうか。

マサミ いいよ。

タツヤ 何だよ、別にパンツ脱げつつってるワケじゃないんだぜ、

立ってみろって言うてるだけだろ、そうすれば分かるんだから。

マサミ いいよ、わかんなくて。

タツヤ なんだよ、せっかく教えてやるつつってんのに、

こういう機会でもなけりや一生わかんないぞ、

マサミ いいよ、一生わかんなくて、

タツヤ 何だ、欲のない奴だな、

マサミ ……

タツヤ ま、いいか、よし、やろうぜ。

マサミ 何を。

タツヤ だから、にらめっこだろ、今やるって言ったじゃねえの。

マサミ 言ってないよ。

タツヤ そうか？ 別にどっちでもいいや、やろうぜ。

マサミ 何いってんだよ。

タツヤ 何が？

マサミ 何で夜中にそんなことしなくちゃいけないんだよ。

タツヤ じゃあ、いつだったらいんだよ。

マサミ いいよ。

タツヤ 最初の一回は練習な。

マサミ (顔そむける)

タツヤ お前、あっち向いてホイじゃないんだからよ。

マサミ やらないつつつてんだろ。

タツヤ じゃあ何がやりたいんだよ、あっち向いてホイか、いいぜ、よくやったな、

前、どっちがコンビニにタバコ買いに行くとかつつつて、

マサミ タバコあるよ。(取りに行く)

タツヤ タバコ吸いたいなんて言っただろ、やろうぜ、あっちむいてホイ。

タダやってもつまんないから、負けたらあれな、カンチョーな、3回。

マサミ 何なんだよ。

タツヤ あ、カンチョーじゃ、罰ゲームになんねえか、お前、好きだもんな、カンチョー。

マサミ 何言っただよ、お前。

タツヤ 隠すなよ、ちよつと試しに一回やってやろうか、(突然大声で)オラオラオラ!

マサミ おい!(逃げる)

タツヤ 何だよ、逃げるなよ……

マサミ 何なんだよ、お前!

タツヤ あ、お前、ヨコチン出てる。

マサミ ……!

タツヤ ああ、違うか、模様か、パンツの。

マサミ 何なんだよ、お前、何しに来たんだよ。

タツヤ 何が。

マサミ こんな(手でカンチョーの形つくって)こんなことするために来たのかよ。

タツヤ 何いってんだよ、だからタコヤキ買ったからって言うてんだろ。

マサミ ウソつけよ、

タツヤ 何だよ、ウソって。

マサミ ……。

タツヤ あ、そうそう、お前そういえば、あれどした、俺がお前にやったGジャン。

マサミ ……！

タツヤ どこだよ、(クローゼットへ)ちよつと着てみるよ。

マサミ (体でさえぎって)何だよ、出ないよ今。

タツヤ 何で。

マサミ だって、かたづけちゃったんだよ。

タツヤ どこに、まさかお前、捨てちゃったんじゃないだろうな。

マサミ だってあれ、脇の所がやぶけてて…

タツヤ 捨てちゃったのか!?なんだよ、直せるだろ、お前そのぐらい、

俺がやめろつつつても喜んで着てたじゃねえかよ、夏のクソ暑い時に、汗かいて。

マサミ だから、捨ててないよ、捨ててないけど、どこいったのかな…

タツヤ あれな、俺、エリのここん所にお守り縫いこんであつたんだよ、お袋の形見の…

マサミ ええ！？

タツヤ あ、やっぱ捨てたのか。

マサミ だって、お前、なんでそんな（大事なもの……）

タツヤ ウソだよ、ヨーカ堂のバーゲンで買ったんじゃないか、あれ。知ってんだろお前も。

マサミ ……

タツヤ トランプでもやるうぜ、どうしたお前、俺の無修正のポルノランプ。

持ってってねえよな、あれは。マサミに、マサミって女の方のな、マサミに見付かるとマズイと思って置いてったんだから、どこしまつてあんだよ、出せよ。

マサミ ……捨てただろ、

タツヤ ええ！？ 何で。

マサミ お前が捨てさせたんだろ、ここ出てく時に、ヤバイから捨てろって。

目の前で俺にゴミ箱に入れさせたんじゃないか。

タツヤ そうだっけ、じゃあれは、男と女がこうなつて腰カクカクするおもちゃ。

マサミ 捨てただろ、あれも、こわれて。

タツヤ どこが。

マサミ ペニスのところが。

タツヤ ペニス！？……

マサミ ペニスだよ。

タツヤ そうか、しかしそうすると、ホントこの部屋にはオレがコンセキがみごとにねえな。

テレビもビデオもCDもねえんだろ。

マサミ 持ってたんだろ、お前が。

タツヤ そうだよ、お前が持ってたから。おかげでマサミと、マサミって女の方のな。

マサミと俺の家の押入れはお前のコンセキだらけだよ、まいつちやうよ、布団も入いなくて。

マサミ お前、何なんだよ。

タツヤ 何なんだよって、何なんだよ。

マサミ お前、何しに来たんだよ。

タツヤ だから、タコヤキだって。何回言わせんだよ。

マサミ そうじゃなくって、

タツヤ 迷惑か、俺来ると。迷惑だったらそう言えよ。

マサミ ……だから。

タツヤ だから何だよ。

マサミ ……迷惑だよ。

タツヤ 何で……

マサミ だって……、そうだろ、さつきから人のいやがることばっかやろうとして。

タツヤ お前いやがってたのか。

マサミ あたり前だろ。

タツヤ だったら、何で怒らないんだよ。

マサミ 怒ってたよ、怒ってたけど……

タツヤ そうか、怒ってたのか、わかんなかったよ。

マサミ お前、もう(帰ってくれよ)

タツヤ そうだ、犬な、あの犬、知ってたんだろお前も、コンビニの並びの、庭で飼ってる。

あれも怒るんだよ、低い声でうなつたかと思うと、突然ワワワってな。何でだと思う。

普通な、ああいう庭で放し飼いになってたような犬は吠えないんだよ、クサリでつなが

れてるのと違ってストレスたまんないからな。それに知ってるか、お前、最近の犬はみ

んな品種改良されてんだぜ、もう吠えるスピッツなんていないんだよ、今は。

だからスピッツみたいにキャンキャン吠えるなんてのはもう死語な。

で、あいつも品種改良だかどうだか知らねえけど、寄って来たんだよ。

人が通ると誰彼かまわず何かくれんのかと思つてよ。

鼻ならして尻尾ふつて、だから俺、あいつに怒るってこと教えてやろうと思つてな。

お前がバイトから帰ってくる時、よく待ち合わせしてただろ、夜中に。

あの時に少し早くここ出て、コンビニでパン買って、それやるフリして、寄って来た所

を、目の間のここん所な、目がけて石でバコンとな。どうなったと思う。ノビちやった

んだ、一発で、クタツと。驚いたよ俺も。死んじまったのかと思つて近付けなかったよ

あの家には。……で、4、5日して昼間、そつと行つてみたら。

どうしたと思う。又鼻ならして寄ってくるんだよ、ここん所バンソウウコつけて。

覚えてねえんだよ、パンもらったこと以外、バカだから。

で、その夜からは今度慎重に寄つて来ちゃバコツ、パン食ってる所バコツつて、

ノビたり跡が残つたりしない程度に。

で、こわがって寄って来なくなったのが一週間目ぐらいな。

そんな時はパンだけ置いて帰って、何日かたって、また寄ってくるようになったら、今度は強めにバコン。やっとその辺から、目つきが悪くなつて来てよ。うなるんだよ。

パンは食いたいくせに、パンだけ置いて早く帰れって言うんだよな。

怒ってんだよ、ちよつとだけ。

で、今度は昼間な、そこんとこ通りかかった小学生ぐらいのガキつかまえて、

パンやってみろよって渡して、俺は電柱のカゲに立って見てたんだよ。

そうしたらあのヤロー、うなつてたと思つたら、突然ガーツて金網に体当たりして。

ガキは驚いて泣くし、飼い主は出てくるし、大変な騒ぎだよ。

怒つたんだよ、ガキにバカにされたと思つて、やつと。

でもそれ以来、犬はクサリにつながれて、ますます目つきが悪くなる。

これが犬の話な。

マサミ ……お前、何でそんなこと。

タツヤ だから、教えてやったんだよ、犬に、人生を、犬生か。

マサミ かわいそうだと思わなかったのかよ。

タツヤ 何でお前に、そんなこと言う権利があんだよ。

マサミ ……

タツヤ ……

マサミ ……お前、まさかその犬、今夜、何か、

タツヤ 何だよ、

マサミ だってお前さつき、新聞載るとか何とか。

タツヤ 新聞に投書しようかと思っただよ、今の話を。

マサミ ……。

タツヤ お前、俺がいると、迷惑なんだろ。

マサミ え？

タツヤ さつき言ったじゃないか、迷惑だって。

マサミ あ、いや、だから……

タツヤ じゃあいいのか、泊まってくぜ。

マサミ でも(布団が)……

タツヤ 布団だろ、いいじゃねえか、一緒に寝れば。

マサミ ムリだよ。

タツヤ だって一組しかねえんだろ、俺は気にしないぜ、お前、気にすんのか？

マサミ ……

タツヤ じゃお前、起きてろよ、一晩中、下で、俺、お前の布団で寝るから。

じゃあな、眠くなっちゃったよ、(ロフトに上る)(寝る)(すぐ起きて)

暑いな上、やっぱ下で寝るか、(フトン、枕、ラジオ、下に落とす)

マサミ いいよ、わかったよ、帰ってくれよ。

タツヤ 何だお前、

マサミ そう言えばいいんだろ、帰ってくれよ、今日は……

タツヤ いやだよ。

マサミ ……何で。

タツヤ だって、お前、タコヤキ食わねえからよ。お前に食わそうと思って買って来たんだぜ、わざわざ駅の向う口まで行って。待ってたんだよ、新しいの出来るまで、屋台の前でつつ立って。

マサミ ……！

タツヤ 食えよタコヤキ。お前食ったら、帰るよ、オレ。(包みあけて)

マサミ ……

タツヤ 食えって、ホラ。

マサミ、つまようじ一つとって、刺そうと、上手く取れない、二回、三回。

タツヤ 何やってんだお前。

マサミ ……

タツヤ タコヤキの食い方も忘れちゃったのか。タコ刺さなくちや落ちるに決まってるだろ。貸してみろよ、ホラ。

マサミ ……

タツヤ 何ながめてんだよ、食えよ。

マサミ、タツヤが刺したヨウジ取って、タコヤキをロの中へ。

マサミ ……

タツヤ ……クチャクチャさせるなよ。

マサミ ……

タツヤ 何やってんだよ、ちゃんと噛めつて、タコは噛まないと消化に悪いぜ。

マサミ (お前……)

タツヤ 口の中にももの入れたまましゃべるなよ、学校で習わなかったか、そういうこと。

マサミ (噛んで、飲み込む) 食ったよ。

タツヤ ああ？

マサミ 食ったぜ、帰れよ。

タツヤ ホントに食ったのか。

マサミ 食っただろ。

タツヤ どっかそのへんに吐いちやったんじゃねえの？

マサミ 何言ってるんだよ、見てただろ。

タツヤ ちよつと、口の中、見せてみるよ。

マサミ いいよ、何言ってるんだよ、入ってねえよ。

タツヤ バカ、違うよ、ノリだよ。

マサミ ノリ。

タツヤ 青ノリがつくんだよ、歯に。

マサミ (口おさえて) つかねえよ。

タツヤ つくんだって、……あ、バカ、手でやるなよ、汚いだろ、舌でやれよ舌で。

何の為に舌がついてんだよ。舌でこう、右、左って、車のワイパーみたいに。上の方もな。お前の場合、歯グキにくつつくんだから、特に。逃げるなよ、ちよっと見せてみるって。

マサミ (逃げ回っている) やめてくれよ。

タツヤ 何言ってるんだよ、取れたかどうか見てやるつつってんだろ。

見せてみるよ、口あけて、歯グキ出して。

マサミ 止めるよ、帰れよ。

タツヤ 何だよ。

マサミ もう止めてくれよ。

タツヤ 何言ってるんだよ、何止めるんだよ。

マサミ もう、いたぶるなよ、もういいよ、もう帰ってくれよ。

タツヤ タコ焼き一つで、何大袈裟なこと言ってるんだよ。

あ、お前、やっぱ全然とれてねえよ、でかいのがくつついてるぜ、ハグキに。取ってやるよ、こっちは来いって。

と、マサミ、キッチンへ。

出て来た時は庖丁をかまえている。

一方の手は口。

マサミ ……出てけよ。

タツヤ ……何だお前、それ。

マサミ ……

タツヤ 何だよ、そういうのあったんなら、はじめから出してくれよ。

マサミ (手に口あてたまま)俺は犬じゃねえ。

タツヤ 何？

マサミ (指の間あけて)俺はお前の犬じゃねえんだよ！

タツヤ (のぞきこんで)青ノリ。

マサミ (手で押える)……かえれ！

タツヤ ……あれ、お前その庖丁。

マサミ 来るな……

タツヤ それお前、俺がマスターに頼んでもらって来たやつだろ、みちのくの。

マサミ ちがうよ。

タツヤ あるじゃねえか、俺のコンセキが。

マサミ 買ったんだよ、同じの。

タツヤ でも同じ所、歯こぼれしてないか？

マサミ ちがうつつつてんだろ、来るなよ、殺すぞ。

タツヤ 興奮するなよ。

マサミ 出てけつつつてんだろ。

タツヤ 興奮するなって言ってるんだろ。

マサミ 出てってくれよ、頼むから。

タツヤ 今度は頼むのか。

マサミ 疲れてんだよ……

タツヤ 何が。

マサミ 疲れてんだよ、……わかってんだろ、お前。

タツヤ そりゃそうだろう、夜中にセーラー服かっぱらって走り回ってりや。

マサミ ……

タツヤ お前があんなに足早いとは思わなかったよ。

マサミ ……

タツヤ そうか、そしたらお前に頼むかな、

いや実はな、マサミ、マサミって女の方のだけどな、マサミ、男と遊びに行っただよ。この間から、何かおかしいと思ってたんだけど、何となく聞いたら、

あつさり開き直ってよ、外人らしいんだよな相手は。

マサミ ……

タツヤ で、これはもう話合いにもならないから、もう殺るしかないと思うんだよ。

で、お前やってくれない、セーラー服着てやりやバレねえんじやねえか。

マサミ ……

タツヤ いるとはわかってんだよ。今ならまだホテルのバーな、そのあと部屋行くんだけど、上に上られると面倒だからさ、バーにいる間に、それでブスツと、なア、頼むよ。

マサミ ……外人かよ。

タツヤ 外人。

身長が3mぐらいあって腕と背中に毛がはえてて、山の中裸足で走り回ってたよ。

マサミ ……

タツヤ 雪男だろそれは。

でもお前、ちよっとセーラー服は着てみつか。

(とボックス開けて、中の紙袋からセーラー服出して)

マサミ !

タツヤ お前これ試着はしてみたのかよ。

試着出来るわけねえか、かっぱらって来たんだから。

でもお前なら入りそうだな、これ。

マサミ やめろ。

タツヤ これ下着はどうすんだよ、下着もかっぱらったのか、ちよっと着てみてくれよ。

マサミ 来るなよ。

タツヤ 着てみるよ、脱がしてやろうか。

マサミ やめろ、刺すぞ。

タツヤ 遠慮するなよ。

マサミ ホントに、刺すぞ。

タツヤ 刺せよ。

マサミ ……(一瞬止まる)

タツヤ そうすりゃ明日の新聞に載るよ。

マサミ ……

タツヤ どうしたんだよ、刺せよ、刺してみろよ、試しに。

犬の声。

タツヤ どこ見てんだよ。こっち見ろよ。俺はお前に話してんだから。

マサミ ……見てるだろ。

タツヤ ああ、そうか、今日俺コンタクト入れてねえから。

お前やっぱ、その包丁、あれだな、みちのくのだ、ここに一緒に居たころよく行った。

マサミ 違うよ。

タツヤ そうだって、

マサミ 違うって。

犬の声。

暗転。

エピソード 部屋。

夜あけ、鳥の声。

コーヒークップを持ったタカコ。

ズ田はまだ、テーブルでウオークマンを直している。

指にはサビオ、目の下に隈。

タカコ ……ズ田くん、少し眠れば、

ズ田 すいません。

タカコ 私は別にいいんだけど。どうせ今日は寝ないで行くつもりだったの。

まちがえて布団も送っちゃったから。

ズ田 新幹線、何時でしたっけ。

タカコ 8時……。

ズ田 じゃあ、それまで、下のコンビニで立ち読みでもしてて下さい。

その間に直して、ここ置いて、それで帰りますから。

タカコ ……いいワヨ。

ズ田 もうすぐですから、あとこのフタだけです。

タカコ ピザ、来なかったワネ、結局。

ズ田 ……。

タカコ、窓から外見て、

タカコ ……。

メ田 ……。

タカコ 出来た？

メ田 立ちあがりは完璧になりましたから。これ部品余りましたけど、気にしないで下さい。

関係ない奴ばかりですから。(帰り支度を始める)

タカコ ……聞いてみようか、

タカコ、テープをバッグから。

メ田、イヤホン差して、タカコに。

タカコ 一緒に聞こうよ。

タカコ、イヤホンの一方をメ田に。

メ田 ……(受け取る)

一つのイヤホンを片耳づつして並ぶ二人。

メ田 (テープ受け取って、入れる)スイッチ押してみして下さい。

タカコ 梅田くんがやってよ。

メ 田 ……。

タカコ だって、こういうのは、直した人がやらなくちゃ。

メ 田 ……じゃあの、立ち上がりの所、よく聞いて下さい。

とりあえず、直ったのは分かると思うんで。

タカコ ……(うなづく)

メ 田 いきます。

スイッチ入れる。

タカコ ……。

メ 田 ……。

タカコ ……。

メ 田 まるで立ち上がらないですね。

タカコ ……。

メ 田 何だよこれ、今度はヘッドか、テープは回ったんですよ、今。

タカコ ……いいよ、待とうよ、もう少し、

メ 田 ……。

タカコ もう少し待てば、きっと立ち上がるって。

暗転。